

第5回

前橋高校 Oxbridge 研修

報告書



日程：平成31年3月13日(水)～20日(水)

目 次

目 次	1
はじめに（大栗勇一校長）	2
研修行程	3
添乗員報告（I S A 遠井勤）	4
引率者報告（中村理恵教諭）	1 6
相川 哲哉	1 8
阿部 優翔	2 0
石田 悠人	2 2
碓氷 創平	2 4
大上 伊吹	2 6
岡部 遥太	2 8
荻原 滉太	3 0
小野里歩巳	3 2
小野 颯人	3 4
菊田 恭平	3 6
木村 王	3 8
小林 史弥	4 0
小林 雄太	4 2
齊藤 圭洋	4 4
齊藤 真澄	4 6
佐々木 瞭	4 8
柴崎 幹馬	5 0
清水崇太郎	5 2
高橋 香貴	5 4
高橋 泰平	5 6
多賀谷大輝	5 8
店網 周平	6 0
田中 伊咲	6 2
田中 優	6 4
平林 燿	6 6
星野 慶人	6 8
茂木 光	7 0

はじめに

校長 大栗 勇一

オックスブリッジ研修も5回目を迎えました。

研修初日の早朝、今年は、研修に出発する生徒諸君に、次のようなはなむけの言葉をかけました。

皆さん、「高峰譲吉」という科学者を知っていますか。皆さんが今回訪れるオックスフォード大学やケンブリッジ大学と並んで、イギリスで歴史と伝統のある大学にグラスゴー大学があります。明治時代の前期、そのグラスゴー大学に「高峰譲吉」が3年間留学しているんです。彼は、工部大学校という、今の東京大学を卒業するとともに、選ばれて、「世界の工場」と言われたイギリスに留学し、特に化学の知識を学んだそうです。

しかし、彼は講義というよりも実地を学ぶ道を選んだそうです。帰国後に実際に活用できるように、各地にあった工場を訪れては見学させてもらうということを正に貪欲に行ったそうです。

そして、帰国後は、国内で国の役人をしながら、研究とビジネスを始め、まもなく、アメリカに渡って、その研究とビジネスを続ける中で、あの「アドレナリン」「ジアスターゼ」の発見・発明をして、医学の進歩に大いに貢献したということです。現代で言えば、当然ノーベル賞ということでしょう。貪欲に過ごした3年間の留学経験が、彼の開拓者精神を育んだ。そして、その後年の意欲的な業績につながったという訳です。

皆さんの研修は、「高峰譲吉」のような何年間という留学ではなく、短期間ではありますが、世界の一流に接することができるイギリスにおける、しかも世界の大学中の大学を経験できるという内容ですから、「高峰譲吉」の如く、貪欲に見学・吸収し、また体験してきてください。

ほぼ以上のような内容でした。近代の文化や学問、社会の諸制度、また先進の産業経済をヨーロッパ世界から積極的に取り入れようとした明治時代の一例です。そして、時代は1世紀以上も下った現代の日本では、グローバル化の進展に伴って、世界で通用するグローバル人材の育成が強く求められています。そして、本校のオックスブリッジ研修も、そうしたグローバル人材を育てることを目的として実施しています。そして、群馬という地方にありながら、社会のリーダーを育成するという使命を持つ前橋高校にとっても、この研修の意義は大きいものがあります。

今回の研修を通して、「世界の一流」の一端に実際に触れたことが、研修参加生徒の心をどの位刺激し、その将来をどの位変えていくか。おそらく、彼らは、志をより高く設定し直し、今後の行動もより意欲的・積極的になっていくものと、大いに期待します。また、彼らが経験し、体得してきた研修の成果が、前橋高校生全体に行き渡ることを願ってやみません。

結びに、今回の研修の実施に当たり、株式会社アイ・エス・エイの高崎支店長永井涼子様、添乗員として何かとお世話いただいた遠井勤様、学校側の担当者としてご苦勞いただいた加藤俊介教諭、引率を快く引き受けてくれた中村理恵教諭、事前研修でお世話になったALTのパウモンク・クリストファー先生をはじめ、ご協力いただいた全ての方々に感謝を申し上げ、挨拶といたします。

✧ 研修行程 ✧

日次	日付	都市名	交通	時間	スケジュール	食事		
						朝	昼	夕
1	3/13 (水)	前橋市 成田空港 ロンドン メイデンヘッド	専用バス BA6 専用バス	6:00 9:30 頃 12:35 16:15 夜	学校集合後、バスにて成田空港へ 成田空港到着後、出国手続き ブリティッシュエアウェイズ6便にて空路ロンドンへ出発 《日付変更線通過》 ロンドンヒースロー空港到着 入国手続き後、専用バスにてパークシャーカレッジへ移動 寮に到着後、オリエンテーション (寮)	朝 機	昼 機	夕 ○
2	3/14 (木)	メイデンヘッド ロンドン メイデンヘッド	専用バス 専用バス	朝 終日 夜	ロンドンに向け出発 ロンドン市内見学研修 (大英博物館、自然史博物館、バッキンガム宮殿、ウェスト ミンスター寺院等) UCLにてレクチャー及びキャンパス見学 専用バスにて寮へ移動 イブニングアクティビティ (寮)	○	○	○
3	3/15 (金)	オックスフォード メイデンヘッド	専用バス	終日 夜	オックスフォード大学見学研修 キャンパスツアー及び、オックスフォード大学生または留 学生との交流会 専用バスにて寮へ移動 イブニングアクティビティ (寮)	○	○	○
4	3/16 (土)	メイデンヘッド ケンブリッジ	専用バス	午前 午後	ケンブリッジに向け出発 ケンブリッジ生と合流し、キャンパスツアー ケンブリッジサイエンスフェスティバル (寮)	○		○
5	3/17 (日)	ケンブリッジ		午前 午後 夜	ケンブリッジ大学生とのセッション ケンブリッジ大学生とのセッション ワークショップ (寮)	○	○	○
6	3/18 (月)	ケンブリッジ		午前 午後 午後	ケンブリッジ大学生とのセッション ケンブリッジ大学生とのセッション 成果発表 (寮)	○	○	○
7	3/19 (火)	ケンブリッジ ロンドン	BA7	5:30 10:50	専用バスにて空港に向けて出発 ブリティッシュエアウェイズ7便にて空路帰国の途へ (機内泊)	○		機
8	3/20 (水)	羽田空港 前橋市	専用バス	7:35 12:00 頃	羽田空港到着 専用バスにて学校へ 学校到着後 解散 * * * お疲れ様でした * * *	機		

□ 食事条件: 機=機内にて、○=レストラン、お弁当など

□ 時間帯の目安: 早朝:04:00-06:00 朝:06:00-08:00 午前:08:00-12:00 午後:12:00-16:00
夕刻:16:00-18:00 夜:18:00-23:00 深夜:23:00-04:00

◆現地第1日目：3月13日（水）

夜もあけやらぬ早朝よりお越しいただいた保護者様にお見送りいただき、そして校長先生はじめ、諸先生方の大きな期待のなか、今年度のOxbridge研修参加者27名を乗せたバスは、一路成田空港へと出発いたしました。

第5回を迎える本研修の変わらぬテーマとなっている“生き様研修”、具体的には「自分自身を深く見つめ」、「リーダーとしての自覚と成長（各個人の）」、「同時にチームとしての成長」を、事前の説明会でも大きな期待としていただきました。そしてこれらを達成するために、校長先生からなげかけられた「貪欲さ」と「個々のテーマ設定とアクション」、代表生徒挨拶にその場で名乗りを上げてくれた星野君のことからはそれらを高いレベルで達成する気概が感じられました。

成田まではのんびりと・・・と思うのも束の間、中村先生からは早速に負荷がかけられ、英語による生徒同士のセッション（自己紹介にはじまり、学校や地域アピール）、個々の目標発表等、空港までのおよそ3時間は機運を高めるに十分、いや十二分、まさにあつという間の到着となりました。

成田空港到着後、順調に手続きを終えた生徒たちを乗せたブリティッシュ・エアウエイズ機は、大きな期待と決意、そして少しの不安もあるでしょう、27名のそれぞれの思いとともに、定刻の12時35分いざイギリスへと出発いたしました。

さて、およそ12時間の長いフライトののち、現地時間の15時55分、無事にロンドン・ヒースロー空港に到着。成田出発時同様、幸運にもその後の諸手続きも順調に進み、およそ1時間20分後にはバスに乗り込み、いざ研修地（Berkshire College）へと出発いたしました。イギリスでは珍しいと言えるくらいの青空の出迎えと穏やかな気温に、まさに意気揚々と言った様子で乗り込んだ生徒たち、阿部くんからの英語でのスピーチ（ガイドさんと、ドライバーさんへの挨拶）にはじまり、その後もガイドさんの話に皆熱心に聞き入り、美しくのどかな車窓の風景、時折見える遠く古城にイギリスを感じつつ、それぞれに気持ちを高めていたようです。

18時前、空港から西部へおよそ40分程度、のどかなエリアに位置するBerkshire Collegeに無事到着。担当者の出迎えを受けると、早速夕食（サンドイッチ）が準備されました。降機間際に食べた機内食が影響してか、男子校らしからぬ小食ぶりでしたが、日本とは異なる味わい（なかには？というものも・・・）を楽しんでいたようで

す。

すでに週明けよりスペインからの生徒40名（12～13歳程度）が滞在しており、夕食後は急遽彼らとの交流会をセッティング。星野君からの代表挨拶とそれにこたえてくれたスペイン生徒からのコメント（ともに英語）に始まり、1時間ほどでしたが、アクティブなゲーム等を通じての相互交流の機会に、そして時差による眠気を刺激し、むしろ長時間のフライトによる疲労を癒すにはちょうどいい運動にもなったようです。

前橋高校生徒に比べれば当然見た目やふるまいは幼い彼らですが、全員が流暢な英語を話す彼らがいたところで終始アクティビティをリード。一見楽しんでいましたが、終了後の前橋高生徒からのコメント（本日のフィードバック）では、彼らの英語力の高さはもちろん、それ以上に積極性（むしろ、“energetic”がふさわしいです）への言及がありました。同時に聞き取れなかった、あるいは引っ張られている状況の自分（ほぼ前橋高生徒全員）の英語力不足認識も当然あったのでし、しかしこの研修ではとにかく臆せず前に出ること、アクションをしなければ、とのコメントが印象的でした。また、日本出発からこれまで、代表挨拶やコメントを求められる場面では、いつも同一生徒（星野君ですね）がいつしか当たり前に。皆がどう思っているのか本日は何も言わず見ておりましたが、「手を挙げられない自分（たち）、まかせてしまっている自分（たち）・・・」、これについての言及があったことでは、スペイン生徒たちとの交流が「楽しい」だけではない意義があったものと、嬉しく感じました。

翌日の連絡事項を伝え、22時前に解散となったものの、ベッドが足りていない、トイレが流れない（複数回）、シャワーが途中で止まる、しまいにはシャワー利用可能時間を越えて注意を受ける（交渉して延ばしてもらいましたが）という早速の理不尽（ほぼ予想されていましたが）、イギリス初日の洗礼を受けつつ、本日のプログラムが終了となりました。これからの一週間、時に起こる理不尽に対して臨機応変な思考と対応が各人に求められ、ひいては多くのチャンスを作る（失う）のも自分であること、突きつけられていくことでしょう。我々は安全な環境提供（管理）と合わせて、彼らの行動をしっかりと見守っていきたいと思います。

以上、研修初日の報告とさせていただきます。

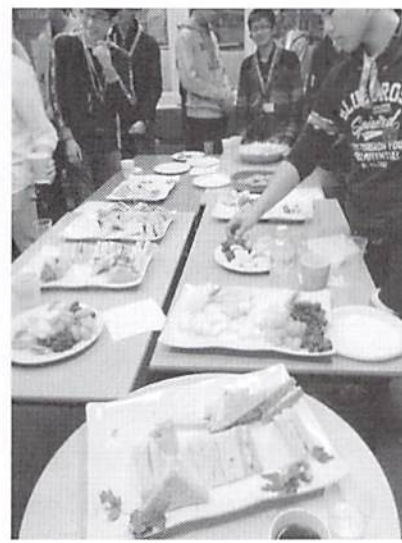
<学校にて…出発式>



<現地空港到着>



<プログラム担当者「Chris 先生」の出迎え>



<スペイン生徒たちとの交流>



◆現地第2日目：3月14日（木）

朝7時40分、全員元気に朝食会場に集合。8時30分のバス出発予定にて、また長時間のフライトの疲れから初日の万一を考慮し余裕を持って（朝食開始の20分前）の集合といたしましたが、心配には及ばず皆5分前には元気な顔を見せてくれました。

イギリスならではのこんがりとかために焼いた薄いスライスのトーストとシリアル、スクランブルエッグとジュースをながしこみ、8時30分過ぎ、バスにてロンドン市内へと出発いたしました。

ある程度想定はしていたものの、やはり世界に誇る巨大都市ロンドン。渋滞税（Traffic Congestion Charge）のシステム導入後は、かなり緩和されたと言われるものの、やはり市内へと近づくに連れひどくなる渋滞に巻き込まれながら、およそ45分ほどの遅れにて最初の見学地「バッキンガム宮殿」に到着。エリザベス女王がいらっしゃる（サインである旗が掲揚）ことを聞き、何となくの感嘆の声を挙げつつ、徒歩にて次の目的地へ。レンガや石造りの歴史ある重厚な建物群に圧倒されつつ、時折見える石畳や美しい都市公園、横を歩く馬車、ダブルデッカーバスや名物ロンドンタクシーなど、まさにイメージ通りのロンドンの景色に目を奪われつつ歩を進めると、ほどなくしてウェストミンスター寺院が見えてきました。そして、その奥にはロンドンのシンボルと言えるでしょう、英国国会議事堂の大時計（ビッグベン）が・・・しかし、21年までの改修工事にてその姿は残念ながら見えず、教科書に出ている写真のイメージを重ねあわせながらさらに歩を進めました。首相官邸（ダウニング10番街）、外務省を過ぎ、ロンドンアイやテムズ側を遠くに眺めつつ、次の見学地「トラファルガー広場」へ。バス降車時点では青空が顔を覗かせ、あたたかさすら感じてまさに「意気揚々」と歩をすすめるうち、冷やかな風とともに小雨がばらばらと・・・程なくして小型の台風かと思うぐらいの風と強い雨に傘も役に立たないほどに。しかし、トラファルガー広場に到着後、バスを待つ間には、なんと空一面の青空に。これもイギリス（ロンドン）ならではの体験でしょう、ロンドン塔、セントポール教会は残念ながら立ち寄りませんでしたが、むしろロンドン市内散策に印象を残してくれました。

さて、バスの車内にてまさに流し込むように昼食（サンドイッチ等の弁当）を取ったのち、バスは大英博物館へ。およそ700万点以上を収蔵（うち常設展示は15万点ほど）するとされる、まさに世界トップクラスの規模を誇る当博物館では、とくに展示が充実しているとされる古代エジプトや古代ギリシャ、ローマ時代を中心に、ロゼッタストーンやミイラに代表される考古学的に貴重な出土品、美術品、そして忘れてはならないミュージアムショップでの買い物、と与えられた1時間30分では膨大な展示物のほんの一部を垣間見る程度ですが、生徒それぞれ楽しみにしているフロア、展示物へとまさに一目散でした。

その後、博物館から10分ほど歩き、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロン

ドン（University College London : UCL）へと向かいました。出迎えていただいたのは、ケンブリッジ大学にて物理学博士号取得後、ここUCL電子工学科にて講師として教鞭をとられている紅林先生、そして同じくケンブリッジ大学にて物理学博士号取得後、オクスフォードでは日本語学修士号取得、現在は地元鹿児島にて起業家（NPO法人「Glocal Academy」設立）として活躍をされている岡本先生、昨年に引き続き両名にお越しいただくことができました。

紅林先生からは、ご自身の決して優等生ではなかったと仰る高校時代までのご自分、さらには大学受験の失敗や、さらに道を見失いかけていた大学時代への言及から現在に至るまで、大きなターニングポイントとなる数々のアクションや当時の考え方は、これから受験と進路を考える生徒たちにはとても大きなアドバイスになったことでしょう。同時に、経験した失敗や後悔、そしてその背景にあった数々の挑戦、「Comfort Zone」から飛び出すことの意義について、「成長」のことばとともに投げかけていただいた時には、生徒諸君の受験や将来だけでなく、まさに今参加している研修の意義、そして初日を終えた自分自身のアクションについて考える機会になったものと感じます。到底本報告書で書ききれぬものではありませんが、強く印象に残ったことばの一つとして、「Why do we have to hire you?」を挙げさせていただきます。ご自身、現在に至るまでのチャレンジと挫折が成長の糧として強調され、ケンブリッジ卒業と現職への誇りを伝えていただけた一方、「肩書」は何の意味もないと断言。真意は、「あなたは今何ができるのか？」と問われたとき、なんと答えらえるだろうか。「リスクを恐れてあるいは結果を想定して何もしないことが最大のリスク」、「困難であっても、成長や挑戦の選択肢を常に選ぶ自分になってほしい・・・」とのことばもいただいたのち、生徒たちの雰囲気ぐっと変わったように感じました。

すでにおなかいっぱいというほどの御馳走でしたが、まだまだ続きます。紅林先生からは、ご経験からの生徒目線でのアドバイスを多くいただいた一方、岡本氏からは、若くしてビジネスの第一線で活躍されている視点・考え方から、これからの社会と必要な人材（資質）、そして自分自身で道を拓くための大きなヒントと強烈な後押しをいただいた、というような時間であったと感じます。まず、慶応大学、同大学大学院博士課程卒業、そしてケンブリッジ大学博士課程、オクスフォード大学での研究過程を経て、と誰もが憧れるような肩書きからは、活躍の場はここイギリス、いや世界をまたにかけて・・・（小職の稚拙の考えですが）、しかし敢えて地元鹿児島選んだとのことでした。理由は、「誰かがやっていないことに敢えて挑戦する」という強烈に志の高いポリシーの元、「世界のどこにいても、世界にインパクトを与えることができる」ということばに生徒たちの視線はさらに上がり、一気に前

のめりになったと感じました。現在代表を務める NPO 法人では、「社会や学術における諸課題を研究的手法を用いて解決する事を目的とし、後進の育成やそれらの課題に取り組む個人及び企業・団体支援<東洋経済 ONLINE 本人記載のプロフィールより>」を目的に、精力的に活動。一つのハイライトとして、国連担当官、UCL の副学長はじめ、高等教育、公的機関、民間企業の有識者等内外から多くのゲストを招き、地元鹿児島で毎年開催（今年第 4 回）を数える「高校生国際シンポジウム」での精力的、かつ明確な目的と使命を掲げた、青少年育成への思いとその活動が印象的でした。本日のセッションでなげかけられた右記テーマ（※いずれも東洋経済 ONLINE 2015～16 年投稿記事）「日本は“格差社会”である前に“階級社会”だ」、「日本の大学入試改革は、なぜ迷走するのか具体性のない“マジックワード”は危ない」、「日本に足りないのは“ローカル”エリートだ！グローバル『以前』の“エリート”の条件」をディスカッションのネタに、生徒へたのみかけるような質問、意見を求めつつセッションは進められていきました。岡本氏のバイタリティ溢れる話しぶり、何より熱意に、いつしか、生徒たちもこの二日間で見せたことのないような雰囲気（熱気に近いでしょうか）を帯びてきました。

到底まとめられるものではないのですが、上記投げかけの本質は、

目の前や表層の現象だけにとらわれず真意（原理）を追求できる人になってほしい（中高校時代の「探究活動」の重要性と目的誤解への懸念から）という彼の思いでした。また、同様に「本質」という観点から、英語を話せる力はもちろん大事だが、日本語ですら話せるものがないのに英語を学ぶとは・・・？と、まさに本研修でも他国の方と対峙する際に強烈に感じている、突きつけられていること、海外での場面のみならず、これからの学習全てにおいても考えさせることばであったと感じます。

両ゲストによるセッション時間およそ 2 時間 30 分、まさにあっという間ではあったものの、生徒個々に強烈なインパクト、自分を変える何か「ヒント」のようなものを得た時間となったのではと強く感じます。

夕食時間は、スペインからの生徒たち（本日が最後の滞在です）とともに、ピザを楽しみました。いつしか、前橋高校生徒からのキーボード演奏やマジックやジャグリング披露、お土産等を介しての文化紹介のスペースに、意欲的に関わろうとする姿は昨日とは別グループのような雰囲気にも感じました。また一方では、そのながれに入れない姿数名も、すでに周囲との差への焦り、自分自身への葛藤など、見えてきているようです。

以上、現地二日目の報告とさせていただきます。

<ロンドン市内見学 バッキンガム宮殿>



<ロンドン市内見学 大英博物館>



<UCL での講演会>



<夕食時の様子 スペイン生徒たちとの交流>



◆現地第3日目：3月15日（金）

7時50分の指定時刻前、余裕を持って全員が集合。本日も元気に朝食を摂り、研修がスタートいたしました。6時前、朝早くから物音が聞こえるなどと思っておりましたが、数名の生徒たちはスペイン生徒たちの出発の見送りに行ったとのこと（時差ボケで毎日5時前に目を覚まして・・・という生徒も多く、活動を始めるにむしろちょうどよかったようでした）。

さて、朝食を食べるとすぐにバスに乗り込み、オックスフォードへと出発。38の独立したカレッジ（加えて6つのホール）から構成される同大学は、現存する大学では世界で3番目、イギリス国内はもちろんですが英語圏で最も古い大学です。25万人を超える卒業生の中には、26人のノーベル賞受賞者、100人以上のオリンピックメダリストも輩出。歴代イギリス首相の内なんと26人が同大学を卒業しているとのことでした。ここ数年、日本の大学ランクの動向でも注目を集めている世界大学ランキング（※Times Higher Education 17-19）にて、3年連続してNo.1の評価を得るなど、もう一つの名門ケンブリッジ大学とともに、言うまでもないですが世界トップの大学です。

ドイツとチェコ出身の2名の現役学生に迎えられ、大学概要の説明が終わるとすぐにキャンパスツアーへ出発。ほぼ街全体がキャンパスというような広大なエリアに点在する38のカレッジのうち、数か所のカレッジやホール、図書館などを2時間ほどにわたり案内いただきました。哲学者ジョン・ロック、「不思議の国のアリス」の作者ルイス・キャロルなどが教鞭をとり、アインシュタインも一時期学んでいた、恐らく最も有名な「クライストチャーチ・カレッジ」（※ハリー・ポッターの撮影に使われた、ダイニング・ホールと階段がある）、オックスフォード最古のカレッジを争う3校の一つ「マートン・カレッジ」、ヒース元イギリス首相、皇太子妃雅子様、マイケル・サンデル教授などが学んだ、やはり最古を争う3校の一つである「ペリオール・カレッジ」、卒業式や大学の公式行事の多くが行われる「シールドニアン・シアター」など、その歴史と重厚なたたずまいに圧倒され、終始感嘆の声をもらしつつ、カメラを押す手は止まることはありませんでした（大丈夫です、学生ガイドの話にもしっかりとらいついていました）。

午後は、本日のハイライトとなるオックスフォード大学現役学生との懇談、及び質疑を中心としたセッションを実施。1時間30分ほどの間、英語でのセッションは前高生といえども相当な負荷となるかと思いましたが、全く心配には及びません。ローテーションにて代わる代わる席につけてくれる学生たちへの質問とメモを取る手は止まりませんでした。一方、「質問をしても、その回答の半分も理解できず、強烈に悔しさ感じながらも、半ば適当でもメモを取っていた」というある生徒のコメントもまた印象的でした。

合計8名（上記ガイドしてくれた学生2名含め）の学生の中には、3名の日本人、そしてなんと皆の先輩（前橋高校出身）がいら

っしかったのです。急遽参加が確定したため、我々も事前情報なく、また当の本人もまさにセッションをはじめたその場で我々が前高であることを理解するというこの上ないサプライズも生徒たちのモチベーションを更に高めたことは言うまでもありません。日本人の学生（3名）だけでなく、他2名も流暢な日本語を話すことができたのですが、前高生は終始全員が英語での質問（なげかけ）を聞いていました。深まる質問や学生からの丁寧なアドバイスにおいては、時折日本語を交えて話していただけたことで、その理解度、インパクトはより強いものになったと感じますし、むしろ非常に有難いものでした。終了後の生徒たちの興奮冷めやらぬ表情、解散ぎりぎりまで学生に質問とアドバイスを求め、半ば引き離されるように会場から連れ出された多くの生徒の姿に、昨日のゲストセッション同様、心ゆさぶられる時間であったことを、感じました。また、これも昨日同様ですが、誰かの質問にのるだけ、聞くだけ、自分からのなげかけが少ない、あるいはできないことへの葛藤と焦りの様子も垣間見え、全員にとって有意義ではあったことは間違いないですが、ある意味「自分自身」を見つめる機会にもなったはずです。その後、わずかな時間でしたが、しっかりと大学ブックストアにてお目当てのグッズを手にし、更に満足の表情を浮かべてバスへ。一路Berkshire Collegeへと出発いたしました。

さて、夜のセッション（昨日、本日もともにChris先生によるスピーキング&コミュニケーション・トレーニングを実施）の後、いよいよ明日からはCambridgeへ研修の舞台を移すこともあり、折り返しの重要なタイミングとして、ミーティングを実施しました。遅刻や怠慢な行動、そして大きな体調不良もなく、しっかりと自己管理をしていることは、彼らが意識高く常に集中して日々の研修に臨んでいる証ではありますが、一方で与えられた研修プラン、時間をなんとなくこなしているような、停滞感のようなものを感じておりました。もちろん、本日午後のセッションで記載したように、個々に頑張っています。しかし、校長先生の言葉にありました「日々（高く）設定した目標と、それを達成する（成長への）アクション」、そして「貪欲に」・・・特に後者について、本来できるレベルのことをやって満足していないか、設定したレベルはそれでいいのか、を皆でそして個々に問い直す時間に・・・というのが会設定の理由でした。その後、ミーティングの進行は生徒にまかせ、40分ほどと十分ではなかったかもしれませんが、チームの仲間にチャンスを出してもらった自分、積極的と言いながら程遠い自分の行動への言及、一方で多くのゲストとのセッションから得た強烈なモチベーションを必ず行動に変える、明日からより高いレベルを意識、など互いの意見から現状の自分を確認し、後半に向け、そして研修後に向けて、思いを強くする機会になったのではないかと感じます。

以上、現地三日目の報告とさせていただきます。

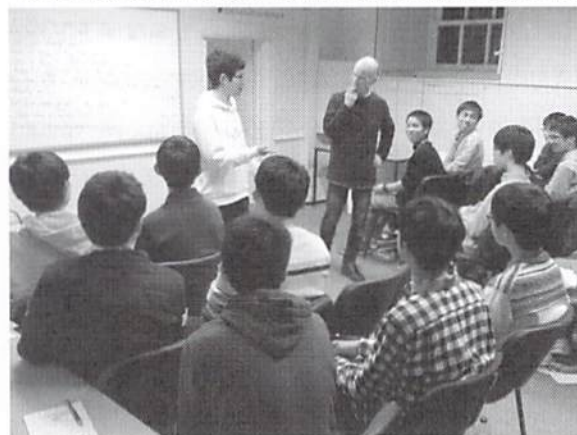
<オックスフォード大学群見学 クライストチャーチ・カレッジ前にて>



<オックスフォード大学 学生とのセッション>



<夕食後の英語クラス Chris 先生による 3/14&3/15>



◆現地第4日目：3月16日（土）

朝7時30分、本日も指定時刻前に全員の点呼完了。週末であること（大学カフェの休日運営スケジュール）、そしてバス出発時刻の都合から、朝食にかけられる時間は“20分”という前日のアナウンスに、むしろ食べられなくなる・・・という危機感からの素早い集合であった生徒も数名（笑）おったようです。理由はともあれ、元気に顔を見せてくれたことは、本当に何よりです。生徒たちの自己管理・体調管理には我々からも感謝をしつつ8時ちょうど、後半戦の舞台となる「Cambridge」へ向けて、バスは走りだしました。

出発前、お世話になったディレクターの Auriol、アクティビティ担当でいつも付き添ってくれた Oliver、そして父親のようにいつも生徒たちの様子をあたたく見守っていただき、毎晩エネルギッシュな英語レッスンを通して生徒への熱いメッセージとエールをなげかけてくれた Chris に対し、生徒を代表して2年生阿部くんより感謝の挨拶がありました。

2時間弱の移動ののち、バスはケンブリッジエリアの Kaetsu Educational & Cultural Centre に到着。出迎えていただいた我々のケアを担当いただく Peter さんより Welcome の挨拶と簡単な施設紹介をいただくと、早速にケンブリッジ中心部へと徒歩にて出発いたしました。

Kaetsu（嘉悦）教育文化センターは、教育プロジェクト、国際会議、コンサートや公演、展覧会など、多目的な利用と、日英の教育・文化交流の場を主目的（※当センターWEB ページより引用）して、1994年ケンブリッジ大学群の一つであるマレイ・エドワーズ・カレッジ敷地内に建てられました。

ケンブリッジエリア中心部指定場所に到着すると、すでに5名の学生が我々を待っていてくれました。イタリアやフランス、ベルギーなど、出身国もさまざま、これまで出会った人たち同様に、彼らの素敵な笑顔とフレンドリーさは、生徒たちの緊張も和らげてくれたようでした。各グループ内にて相互に自己紹介を行うとすぐ、まさに映画の撮影セットにいるような街並みのなか、カレッジ見学へと出発いたしました。

2019年のTimes Higher Education World University Rankingsでは第2位、言うまでもなくオックスフォードと双肩する英国が誇る世界トップレベルの大学です。オックスフォード同様にイギリス伝統のカレッジ制（31のカレッジで形成）を採用しており、各カレッジでは「スーパービジョン（Super vision）」と呼ばれる少人数制の授業が行われ、高い教育レベル・質を保っているとのことでした。ケンブリッジでもっとも美しいカレッジとしても有名な「クイーンズ・カレッジ（1448年にヘンリー6世の王妃が設立）」、敷地内にある幾何学的なデザインが美しい「数学橋」も観光名所です。1546年にヘンリー8世設立、アイザック・ニュートンが学び、そしてノーベル賞受賞者を最も多く輩出していることで有名な「トリニティ・カレッジ（残念ながら万

有引力の法則を発見するヒントになったりんごの木の子孫は見られませんでした。）」など、学生の説明からうかがう歴史や背景だけでも圧倒されるに十分でしたが、美しく、カレッジごとに特徴的な建築様式、外観、その佇まい全体の荘厳さにまさに目を奪われながらの約1時間、大学生の説明にもしっかりと耳を傾け、時折質問もトライしながらのキャンパスツアーはあっという間に終了となりました。

手配された昼食（サンドイッチ等の軽食）をさらっと流し込むと、生徒たちの多く（やはり理系の生徒ですね）が楽しみにしている「Cambridge Science Festival」へ。今年は3月11日（月）～24日（日）の約2週間開催、ケンブリッジ市内にいたるところに設置されたブースにて、参加型化学実験を楽しく体験させてくれるイベントです。ガイドさんからの諸注意とオススメブース情報を入手すると、経路を確認、研修前に調べた情報を加味しつつ、ケンブリッジの街に散っていきました。ケンブリッジ大学のカレッジや関連校で大学教授の講義を聴講したり、機械工学物を組立てたり、科学の実験を体験する事ができる（※内容によって事前予約要）このフェスティバルですが、ここ数年はブースの多くが大学キャンパス内から市街地域に移動され、それにともない、対象年齢が下がっているようです。より若い年齢、子供たちに科学の楽しさを！ということが一番の目的となっていると思いますが、戻ってきた生徒たちからも、「楽しかったけれど・・・」というコメントも少なくなかったようでした。ともあれ、ケンブリッジでの贅沢な一日は素晴らしいお土産となったことでしょう。数時間歩き回ったはずですが、その足取りは軽快に、宿舎へと戻りました。

18時、夕食会場に入ると、“カレー”が準備されていました。当センターには、日本人の厨房スタッフ数名が働いていらっしゃり、生徒たちのために特別メニューをふるまっていたとのことでした。当然セッションの上がる生徒たち（そしてもちろん大人も）、Berkshire でのある意味“忍耐”生活との違いに、むしろ懐かしさすら感じながら、束の間懐かしい味に舌鼓を打ちました。

さて、食事を楽しんだのち、すぐに夜のセッションが始まりました。来てくれたのは、Daniel さんと、Maggie さん、もう1名参加予定の学生が研究の都合にて急遽来られなくなったのは残念でしたが、明日から二日間実施する後半のハイライトプログラム「Empowerment」への準備として、Q&A での相互理解（アイスブレイク）、Empowerment プログラムの目的や大まかな進行について、およそ1時間のセッションを行いました。夕食も共にとってくれた彼ら二人は、明日からのメインセッションにも参加してくれます。

さて、本日のプログラム終了後、ミーティングの時間を設けました。振り返り、明日以降への準備、あるいは皆での討議など、解散前のおよそ1時間は、生徒たち自身で使うことができる（研修として皆が意義あるものにする共認）こと、昨日になげかけておりました。

議題は、夕食後のセッションの最後に議論が生じた「前高生によるプレゼン」についてです。本プレゼンを実施する理由、目的（UCLでのセッションにお越しいただいた岡本氏の言葉をお借りすれば『本質』は・・・）について、生き様研修としての本研修の意義含めて深く考えてもらうために、なげかけさせていただきました。小林（ゆ）くんの意見（→日本で準備したプレゼンは、今回実施せず、むしろケンブリッジ生徒のセッションの時間にあて、より充実させたい）を皮切りに、多くの意見（同意、反対）が繰り返し交わされ、到底時間が足りなく

なるであろうことは想定通り、決定は明日となりましたが、彼らそれぞれのことばに“思い”であるとか、“熱意”、が感じられたことが、ひいては本研修への意識を更に高める意味で、この時間の一番の意義であった、と感じました。しかし、苦言を呈してしまうようですが、この時間を何に使いたいのか、使うべきか、事前の相談や生徒同士の話もなかったことは残念ではありましたが、とはいえ、何かが進む機会になったこと期待します。

以上、現地四日目の報告とさせていただきます。

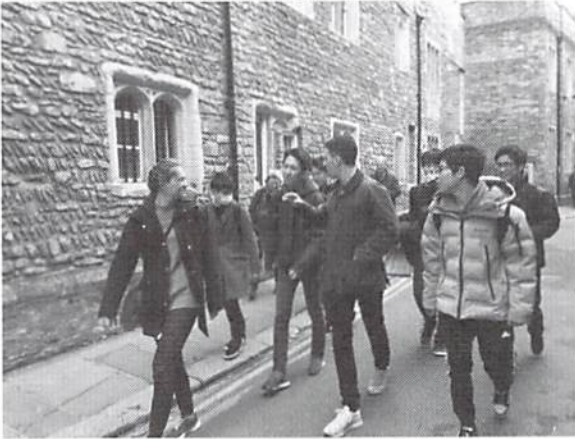
<Berkshire College 出発>



<ケンブリッジでの研修>



<ケンブリッジでの研修 学生とのツアー>



<ケンブリッジ生とのセッション>



<ミーティングの様子>



◆現地第 5 日目：3 月 17 日（日）

朝 8 時 50 分、本日も全員元気に食事会場に集合（もちろん遅刻はありません）。本日日曜日は、通常より 1 時間遅い 9 時にカフェテリアはオープン。当然おなかをすかせた生徒たち、その無言の圧力がカフェスタッフにも伝わったので、3 分ほど早く誘導してくれました。さらに、午前のクラス開始は 9 時 30 分、昨日に続いて正味 20 分という理不尽極まりない状況にも文句を言わず、まるでホテルで提供されるかのようなイングリッシュ・ブレックファスト（スクランブル・エッグ、目玉焼き、ベーコン、ソーセージ、焼いたトマトとマッシュルーム等・・・前半に比べると豪華にすら感じます。）もしっかり味わえなかったでしょう、まさにかきこむように食べ終えると、後半二日間のハイライトとなる「エンパワーメント・プログラム」へと臨みました。

教室で待っていてくれたケンブリッジ大学の学生たち、本日も 1 名のキャンセルが伝えられていましたが、早速に代わりの学生手配が間に合い、予定通りの 5 名が来てくれたのは本当に良かったです。

さて、準備を整えた生徒たちが席に着き、学生リーダー同士の簡単なブリーフィングを終えるとすぐに、セッションはスタート。5 名の学生（Hogai, Maximilian = Max, Emily、そして昨日も来てくれた Daniel & Maggie）からの軽快な自己紹介と二日間の目的共有に、生徒たちの気運も高まり、この 3 日間で得た成果の一つなのでしょうか、英語スピーカー風のぎこちないリアクションを返す様子がまた微笑ましいものでした。

アメリカ出身で英文学を専攻する Hodai (Ms)、ドイツ出身で心理学を学ぶ Maximilian (通称 Max /Mr)、で国際政治を学ぶ Maggie (Ms) は中国出身、そして数学と物理学を学ぶ Daniel (Mr) と考古学を学ぶ Emily (Ms) はともにイギリスの出身です。Hodai は元小中レベルの教師の経験もあり、生徒へのわかりやすい投げかけ、アテンションを引く話ぶりは抜群で、彼女を中心に、パートを担当するリーダーはローテーションしつつ、午前のセッションが進められていきました。誰が担当しても、あるいは急にふられてもすぐに場の流れや雰囲気を読んで対応、適応できる力、関心を引く話題提供、注意を引き寄せる話ぶり、グループ内で意見をまとめ誘導する力、そして笑いをしっかり交えるセンス、あまりに自然に進められるため生徒たちは感じていないかもしれませんが、このような“振る舞い”にこそ、リーダー像を見てほしい、考えてほしいと強く感じます。

12 時 45 分からの昼食（45 分程度）をはさみ 17 時まで、終始スピーキングトレーニングを軸に、プレゼンの構成指導、力強く伝える方法やコツ、そして実践的なディスカッションや随時なげかけられる質問、そしてアウトプットを繰り返しつつ、その熱気は徐々に高まっていたように思います。夕食後のセッション（1 時間）では、ディベートの実践。本日一番、もしかするとイギリスに来て最も頭をフル回転させたのではないのでしょうか、多くの生徒が考えや理由を（論理的に）

伝えきれず、まさにもがく姿、しかし一方でチーム全体が協力してのめり込んでいる様子は、輝いていました。

また、前半では将来の目標（数年先の短期的なもので、かつ具体的に）について、その達成プロセスをテーマに各自短い原稿（案）を作成しました。最終的にはこれの発表へと持っていくながれです。最終発表で伝える内容が、この二日間のセッションを通してさらに肉付けされたり、あるいはより明確に、イギリスで学んだ、経験した色々な思いが加味されて骨太なプレゼンになることでしょう。

出身や専攻、かれらのバックグラウンド同様、個性豊かな 5 名の学生たちとの二日間、終わればわずかな時間であったと感じられるかもしれないませんが、間違いなく密度の濃い、多くのものを得る（正確には獲りに行くでしょうか）時間になるはず。帰国後につなげるために、生徒たちが出し惜しみなくやり切ってくれること期待します。

尚、夕食後の学生との最終セッションを終え、本日のあるいは本日まで振返りを実施しました。基本生徒たちが自由に、しかし「生き様研修」として有意義に使う時間ということで冒頭、「明日がプログラム最終日、学生に感謝の気持ち（スピーチ）と小さなプレゼントを送ろう、では誰か？」と 2 年生二人からの投げかけに、半数近くが拳手。最終的にはジャンケンで決めたようです。

その後、研修の振返りを実施。しかし、反省ではなく、明日につなげる前向きなコメントにしたい、ということ事前の共有として進められました。研修での学びを絶対に生かさなくてはいけないこと、ここで得た自信、ゲストの方々から得た貴重なアドバイスを糧に・・・などのコメントが続きました。前向きな、が前提でしたので、その通りの進行でしたが、コメントが続いていくにつれて、いくつか印象的な言及がありました。「最初の二日間、自分は研修としてもリーダーとしても逃げていた～中略～この研修に多くの後輩を参加させたい。自分たちはどうすべきか（帰国後）も考えるべきだ」、「正直前に出る人たちを冷ややかな目で見ると自分がいた。しかし、その自分が 27 人のなかで本当に小さく、力がなかったこと、痛感している・・・」、そして「自分は前半まるで空気と同じだった。悔しい思いが多いが、明日は絶対にやり尽くす」、「27 人で来ている研修の意義、これも大きな財産。終わっても影響しあい、つながってほしい」。もちろん、前向きなコメントを述べてくれた生徒は「これからこそが・・・」という強い思いをもったコメントであること承知ですが、やはり自分に向き合い勇気を出して伝えてくれたこのようなコメントには我々もぐっときます。

上記に書ききれませんが、明らかに何かを変えようという、あるいはこのままでは・・・という多くの生徒の行動や表情が、色々な場面で目に入ってきます。誰かが言っていました、「やり切る！」、明日はこのことばに集約されるのでしょうか。

以上、現地五日目の報告とさせていただきます。

<ケンブリッジ大学学生とのセッション：「エンパワーメント・プログラム」>



<ケンブリッジ大学学生とのセッション：ディベート>



<ミーティングの様子>



◆現地第6日目：3月18日（月）

いよいよ Oxbridge 研修最終日、もちろん生徒たちは遅れることなく、朝8時00分に食事会場に集合しました。現地でのプログラムは正味5日間ではありましたが、緊張のなか到着した Berkshire College、そして歴史とそのスケールに圧倒されたロンドン市内見学、我々ですら一週間以上前の出来事に感じるほどに、中身の濃い5日間であったのでしょう。そして、体調不良者なく、元気に最終日を迎えられたこと、すべてのプログラムに全員が臨めたことは、本当に何よりでした。

昨日晩のミーティングを受けてか、カフェテリアではグループリーダーへはもちろん、一般の学生へアタックする姿も見られ、個々に「やり残さない」の実践が始まっていたようです。

さて、朝9時00分、「エンパワメント・プログラム」後半（二日目）のスタート前、新たなケンブリッジ大学生の紹介がありました。公共政策を学ぶ、イギリス出身の Jacob (Mr)、実は事前の情報なく急な参加であったのですが、もちろん人数が増えることに何の文句も問題ありません。自己紹介ののちグループの一つに加わり、早速にセッションが始まりました。

午前のセッションでは「リーダー像」をテーマに意見交換を実施、それぞれに研修を通して見えたリーダー像、あるいは自分の目標とする人物、そして本プログラムでリードしてくれる学生らをまさにロールモデルに、個々の考えを発表しました。色眼鏡的な見方が入っているかもしれないですが、昨日より全体的にくつと熱を帯び、それぞれのグループでのセッションにも前のめり感を感じます。個々に、最終日への思いをもって臨んでいることは間違いないでしょう。

セッションの最後は一人ずつのプレゼンテーションです。アドバイスを受けた構成方法、抑揚や間の取り方、効果的なジェスチャーなど、印象に残るような発表テクニックをそれぞれに活かしながら、発表が行われました。ケンブリッジ生を前に、そして27名の仲間を前に、当然かなりの緊張をしていた生徒も少なくなかったですが、その内容には、過去の自分と今の自分、そして将来へ、と本プログラムを経験したからこそ見えてきたであろう、自分自身へ思いやメッセージが込められており、いずれも聞きごたえのある素晴らしいものでした。

夕食を終えると、いよいよ最後のセッションです。生徒たちの一生懸命な取組みと、ひたむきな姿勢を受け、学生からもリアクションの意味と生徒らの将来へのエールを込めて、全員からプレゼンテーションをいただきました。急な依頼でしたので、口頭にて数分程度で十分、発表の仕方はもちろん、個々のゴール設定とそのためのアクションをうかがえるだけでも生徒たちには間違いなく大きな刺激に・・・と思いましたが、その想定をはるかに超えるものでした。おそらくは15分ほど

しかなかったであろう休憩時間のなかで、『My Journey』を共通テーマに作られたスライド資料を使い、自らのバックグラウンド、幼少期及び高校時代への言及からケンブリッジへの経緯、そして研究や学びに対する今の思いと将来のゴール、とその明確かつ志高いメッセージに、強烈なインパクトを受けたことは言うまでもありません。学生らからのコメント（生徒のプレゼンに対して）にもありましたが、プレゼン時に最も大事なことのひとつである「自信」、いずれの学生からも当然感じられるものでしたが、発表の慣れ（回数的な）のような表面的なものではなく、これまで志高く相当な努力で自分の道を切りひらいてきた経験からの自信なのであろうと感じました。

そして、もう一つ本当に最後のプログラムが行われました。何と生徒たち自らが直談判をして設定することができた「ディベート」です。ケンブリッジ生とのディベートなど、これ以上ない経験となることは間違いないでしょうが、単に思い出だけでは意味がありません、本気で論破する気持ちで臨むことを全員の共有として行いました。数名の生徒は、なんと先日買ったばかりの「Oxford」のスウェットを着用、その気概が伺われました（笑）。テーマは、高校における「男女共学システム」の是非、についてです。前高生27名対ケンブリッジ生5名という圧倒的な不均衡（不平等）のもとスタートすると、反対派となった生徒たちから早速の陳述がなされ、それに対してケンブリッジ生の即座の返し、当然理路整然と伝えられる根拠に生徒たちは押されつつもさらに次の陳述、そして徐々に高まる前高生の一体感、これまでで一番のチームワークであったかもしれません。もう手を挙げることに、意見を伝えることに臆している様子などはほとんど見られません。40分程度という制限のなかではチャレンジ、またケンブリッジ生らにとっては経験をさせてあげたい、程度の認識であったかもしれませんが、それでも夢のような時間を過ごすことができたこと、何よりは自分自身の思いとアクションで最後のクロージングにふさわしい機会をつくることができたこと、終わった後の満足げな表情から伺うには十分でした。学生との別れを惜しみながら、全てのプログラムが終了となりました。

いよいよ明日、帰国の途につきます。「生き様研修」としてどれだけの成果があったのかは、現時点では分かりませんし、多くの生徒が、恐らくは全員が課題を抱えて帰るのだと思います。しかし、課題や後悔であったにしても、本プログラムに参加でき、そして参加しただけでなく個々にチャレンジしたからこそ見えた、突きつけられた課題であると思いますので、間違いなく大きな価値があることでしょう。明日朝5時15分、全員が無事に集まることを祈ります。

以上、現地六日目の報告とさせていただきます。

<ケンブリッジ大学学生とのセッション>



<最終プレゼンでの上位評価者>



<ケンブリッジ生からのプレゼン>



<ケンブリッジ生とのディベート！>



第5回前橋高校 Oxbridge 研修を引率して

群馬県立前橋高等学校 教諭 中村 理恵

平成26年度の3月（2015年3月）に始まったこの研修も今回で5回目。本研修で感じることができた様々な面からの学びを総括したいと思います。

1. 空間に身をおき、考える学び

歴史を感じさせるカレッジの建物。広々としたカレッジの中庭。カレッジ生しか使えないといわれる門。石畳を囲む中庭の四方に開かれた学部扉。それらが長い時間に育まれながら、維持されてきた貴重さ。このような場に身をおいている感動。参加した生徒一人一人が、オックスフォード、ケンブリッジという世界最高学府を、歩きながら静かに味わっていました。静かでありながら、世界での活躍を目指して集まって来る強烈なエネルギーの集まった場所。こんな場所に身をおいて考えたことは、きわめて貴重な経験であったと感じます。

2. 人に出会い、考える学び

研修をとおしてさまざまな人に出会い、そこから学び、自分の「生きざま」を考える「生きざま研修」。これが本研修での大きな目的でした。

初日は、第1回からお世話になっているクリス先生に対面し、今年



学生の案内でケンブリッジを歩く



クリス先生と初日の夕食

もワークショップを2日間受けました。生徒は、すでに前高で有名になっているクリス先生にお会いできた嬉しさを英語で伝えていました。ワークショップでは、会話の切り出し方、抑揚など、コミュニケーションのポイントについて学びました。生徒の話す声が次第に大きくなり、抑揚がついた表情のある英語に変化していく様子に、今までの先輩報告者の姿が重なりました。また、初日に同宿となったスペインから訪れた子どもたちと交流もしました。彼らの積極性に触れ、刺激を受けた生徒も多かったと感じます。生徒たちが、子どもたちと嬉しそうに触れあっていたのが印象的でした。

2日目。この日の目玉は、ロンドン大学で紅林氏と岡本氏にお会いしてお話を伺えたことでした。生徒たちは、一言一句聞き漏らすまいとメモをとりながら聞きました。二人から大きな刺激を受けたと思います。

3日目。オックスフォードを訪れ、オックスフォード大の研究者、学生、実に8名の方のお話を伺えました。次々と質問し、貴重な答えを聞く生徒の姿に、日に日に、いや時間ごとにかくましくなっていく様子を感じました。オックスフォードの街で学ぶことが、自分の人生に加えられる可能性を本気で考え出した日となったかもしれません。

4日目はケンブリッジへ移動し、案内に訪れた6人の学生ごとに分かれたグループでケンブリッジの街を歩きました。学生の楽しいトークとともに歩いた経験は、夢のようであったと思います。午後はサイエンスフェスティバルへ。ポスター発表を



オックスフォードでのセッション

した学生に質問し、議論する頼もしい姿にも出会えました。一方、この日は「うまく話せなかった。」「説明が実はわかっていない。」というふがいなさを感じた生徒もいたようでした。でも、このような「小さな挫折体験」が、この研修の大切な要素となっています。



ケンブリッジ生とのワークショップ

5、6日目。この2日間は、ケンブリッジの学生が5人、6人と来てくださり、エンパワーメント・プログラムとしてリーダー性を養成するための自己啓発研修を受けました。次々に出される課題に対して生徒たちは必死に自分の考えをまとめ、繰り返し発表しました。最後に全員が自分の人生において今まで頑張ってきたことをスピーチしました。「考えすぎて頭が痛くなった。」とはある生徒の談。

6日目の朝。すっかりケンブリッジ生と自然な形で対話する場面がそここに見られました。昼には、彼らが自主的に食堂を使って、百人一首や書道、羽子板など、いろいろな交流の場を創出しました。大道芸を披露する場面を探していた生徒も、出席者全員の前で披露できました。生徒の準備がむくわれたとの思いから、記録動画を撮りながら、思わずうるうるとしてしまいました。



6日目朝、食堂にて

夕食後は、ケンブリッジ生が自分たちの経歴と将来の方向性を語ってくれました。プログラムをつくりあげてくれた彼らの行動、姿勢、そして熱心なトーク。素晴らしいリーダー像に直接触れられたことは今後の貴重な財産になると思います。

学びの締めくくりとして、生徒が提案したケンブリッジ生とのディベート対決。「自分の殻をやぶりたい。」といていた生徒が司会に立ち、初日「うまく話せない。」と明かした生徒が自分の意見を堂々と述べる姿は、研修成果の一コマとして、目に焼き付けておきたい瞬間でした。人と出会い、考え、勇気をもって行動する、学びが満載する夢のような1週間が本研修の醍醐味だと感じます。



ディベートの準備中

3. おわりに

今回は、集団を代表して挨拶する有志を募る機会を設けてきました。手を挙げるかの葛藤も含め、多くの生徒がそれぞれの場面で考え、たくましくその役割を引き受け、活躍してくれました。

この研修に参加した生徒が自分でつかみとった「学び」を、今後どのように日々の生活で表現していくかを楽しみにしています。また、参加者に限らず、前高生には足もとの社会を大切にしながら世界で活躍して欲しいと願っています。

最後に、生徒を送り出してくださった保護者の皆様、本研修のためにご尽力いただいた大栗校長先生をはじめ、探究部生方先生、研修チーフ加藤先生、ALT クリス先生、書道加藤先生という研修を事前の段階から積み上げ、形にくださった関係の先生方に感謝申し上げます。そして、常に前高生をリードし、励ましてくれたISAの引率担当遠井様、行程を練り上げ、調整をしてくださったISA高崎支店支店長の永井様、お世話になったすべての方に感謝申し上げます。

本研修のますますの発展をお祈り申し上げ、第5回の研修報告といたします。

●参加に至った経緯

Oxbridge 研修については中学の頃から知っていた上に、参加してみたい、と意気込んでいた。また、自分の将来の夢のきっかけにしたいとも思っていた。しかし、いざ前高に入ってみると周りのレベルの高さに圧倒され、自分が参加できるようなものなのかと迷っていた。また、金銭的にも易々と決められるものではなく、一度親に相談した。そこで親から「経験すべきだ。」と勧められ、志願した。

自分から言えることとしては、本研修に参加するために必要なのは“成績”よりも“意欲”であると断言できる。

●研修内容

主な研修内容としてはクリス先生によるワークショップ、紅林さん岡本さんによる講演、現地学生とのセッション、市内観光が挙げられる。また、夜のミーティングも研修の一部と言えるだろう。(ただし、ミーティングは自主的に行うものである。)

日程はハードなものに見えるかもしれないが、どれも内容の濃いもので、あっという間に終わってしまう。それゆえに、出発前に校長先生がおっしゃられていた「食欲に学ぶ」という姿勢をもつ必要があると感じた。

本研修のサブタイトルである“生き様研修”には、海外で活躍をする方々の生き様を生で感じ、それを自身の将来に活かすという意味合いが込められている…はずである。本研修では、学んできた生き様をいかに自身のもののように捉え、真似ることができるかが重要であると思う。



左が Oxford 生との写真 右が Cambridge 生との写真

●今回の研修を通じて気付いたこと

今回の研修で自分が気付いたことは2つある。まず1つめは、英語は面白いということである。もちろん funny のほうではなく interesting のほうである。今まで座学の英語では体感することのできなかつた面白さである。授業のなかで英語での会話をするところがあるが、その相手のほとんどは日本人。いささか懈怠の心があるにちがいない。しかし、今回の研修では自分のつたない英語を全力でぶつけることが出来た。度々、伝わらないことや聞き取れないことがあったが、それでもドイツやフランス、中国などの方々とコミュニケーションをとることができるということに感銘を受けた。約 1 週間という研修期間で

猛烈に英語が上達したかといわれると、そうではない。だが、英語で話すことへのいわば恐怖心というものを取り除くことができ、次へとつなげることができた。

そして2つめは、自分が見ていた世界は小さかったということだ。このことに気付いたのは、研修初日であった。研修初日、寮につくとスペインの中学生が大勢いた。彼らはわずかながらも日本語を知っていた。自分を含め、多くの人がスペイン語での挨拶すら知らなかった。そこで彼らとの差を感じたし、OxfordやCambridge生の目標を聞いた時も同様であった。1人を例に挙げると、その方は国連で働きたいと言っていた。国連という言葉聞いたときは内心驚いた。大きなビジョンを持っていたからである。もちろん、この方だけでなく、全員がそれぞれのビジョンをもち、何をどうすればよいか明確に理解していた。何も将来を見据えていない自分が愚かに感じた上、彼らを羨ましいとも思った。そして、このことを彼らに伝えたところ、「自分も夢はなかった。今は目の前のものを沢山経験すべきだ。」と教えてくれ、とても説得力のある話だった。この2つのことに気付くことができただけでも大きな収穫だと思うし、この研修に参加して良かったと思うことができた。

●まとめ

今回の研修の成果は何か？と聞かれると、まだ言葉でしか説明することができない。だが、それを行動



で示すことができるようになった時、その時がこの研修の完結だと思う。それまでにはOxford生やCambridge生が積み重ねてきたような努力をしなければならぬ。彼らの真似をすることは決して間違ではないと思う。そのためには、紅林さんの言葉を借りていうと、人生の分岐点にぶつかる毎に難しい、大変な方を選ぶ必要があるということだ。言いたいことを書いているだけで、まとめになっていないかもしれないが、1つだけ言えることとしてはバカになることが大切だということ。失敗するのが怖いという変なプライドを捨てるべきである。自分は2日目にしてプライドをズタボロにされ、3日

目からは少しずつ変わることができた。そうでないと、ただ後悔するだけで研修が終わってしまい、50万以上の価値どころか50万の価値すらも得られなくなってしまう。

今回の研修ではお礼の挨拶をすることを大事にしてきた。この経験を活かして、周りへの感謝を忘れない人間になっていきたい、いや、なる。ぜひ、次のOxbridge研修でもお礼の挨拶を大事にしてほしい。

参加しようか悩んでいる1、2年生にお願いというかアドバイスをすると、まず迷っているのであれば難しい選択肢を選ぶべき。つまり応募するということ。さらに、この報告書をよく読むこと。僕の報告書でなくても結構。誰か1人のはよく読むべきだと思う。(自分は一切読まずに研修に参加してしまい、よくわからないままできてしまった。)

最高の研修

阿部 優翔

●まずはじめに

まずこのページではいかに Oxbridge 研修が本当に素晴らしいかということ伝えるために使おうかと思う。そしてこのページを見ている君はラッキーだ。なぜならこのページを見て Oxbridge に興味を持ち、選考に落ちなければ、行っているはずだからだ。

●研修内容

一日目 飛行機・パークシャーカレッジでスペイン人と交流(急遽)

二日目 ロンドン市内見学・岡本さん紅林さんによる講義・クリス先生とのセッション

三日目 オックスフォード大学見学・その大学生と交流会・クリス先生とのセッション

四日目 ケンブリッジ生とキャンパスツアー・サイエンスフェスティバル・ケンブリッジ生とのセッション

五日目 ケンブリッジ生とのセッション・ディベート

六日目 ケンブリッジ生とのセッション・スピーチ・ディベート

七・八日目 飛行機

●研修前

私はもともと人前に出て発表したり話したりするのが苦手な嫌だった。勉強ができるかと言えば微妙だし、運動神経もない。そんな自分は他に何ができるのだろうか、将来何ができるのだろうか悩んだ。そこで、「また逃げるのか。」と自分に問いただした。「この Oxbridge 研修で何かを変えよう。何かを掴もう」と思った。それがこの研修のきっかけだった。

●研修中(に考えたこと)

この研修は見たもの、聞いたこと、全てが面白い。話のネタにもなるし、面接とかで使えるかもしれないが、なによりも自分自身を変えるきっかけになる研修だったと強く思う。たしかに群馬にいても自分を変えたり、何か能力を高めたりすることができるかもしれない。しかしそのきっかけを作るのが難しいのではないだろうか。研修前は外国人と喋れるか不安だったが、驚くことに、意外といけた。初日はスペインの中学生がいて、彼らのテンショ



ンについていけなかった w。そして彼らは日本語を知っていたのだ(少し)。自分たちはスペイン語を知らないのに…。偶然にも面白い男の子と隣になって、英語が速すぎて何を言ってるかわからなかったが楽しむことはできた。二日目の夕食の時、前高生はピアノや大道芸、けん玉で盛り上げていた。実は折り紙と地図帳しか持って行かなかったのだ！(準備不足とは言っていない w)前高生数人で話しかけたが会話がスムーズに広がらない。また女子はきつかった、不慣れすぎでした。三日目以降はオックスフォード・ケンブリッジ生とセッションをした。二度とないかもしれないチャンスだったので質問を多くぶつけた。だが中にはめっちゃくちゃ速く喋る人や声が小さい人もいた。そこで“Please speak more slowly”など言えなかったのが課題になる。サイエンスフェスティバルやキャンパス内の移動中などで一人で色々な人に話しかけることができたのは目標が達成できた物の一つだった。また今書いた人たちはもともと私たちに welcome なので話はしやすい。私は六日目の朝食で気づいた。「まだそんなに stranger に話しかけていないじゃないか。」と。実はそれが一番難しい。朝食時に二人のケンブリッジ生に声をかけた。流石に一人ではチキンになってしまうのもう一人の二年生イケメン k 君と一緒にいった。最近話題になって自分も好きになった QUEEN について話して盛り上がった。そんなこんなで最終日のスピーチでは自分のできる限りを出した。まあ他人から見たら普通かそれ以下かもしれないが、自分の過去は超えることができた。課題として残ったのは聞く力と声が低いので、声をはっきりと大きく話すことだ。

元来、私は受験に受ければいいと考えていた。中学・高校の時は勉強、部活に打ち込むことで面倒くさそうな外部活動などを回避していた。だが二日目の紅林さんの話で間違いだったことに気づいた。彼の話によると、人生で成功？するには何をすればいいかわからないが、成功した後には何が要因なのかわかる、だから今やっていることに精を出せと。つまり偶然を積み重ねて成功するには、常に自分にとって難しい選択肢を選ぶ。あとで気づいたのだが、学校の現代文の教科書にある「芝」では「連綿と続く時間の中で、何が無駄か言い当てることは、実はそう簡単なことではない。無駄に見えることであっても、それはそれで、その人の生の一部を確実に成している。」とある。また英語の教科書の Steve Jobs のスピーチでは「You can't connect the dots looking forward; you can only connect them looking backwards, so you have to trust that the dots will somehow connect in your future.」とある。実は私たちが使ってる教科書が既に教えてくれていたのだ。一年ぐらい前に見たホリエモンのスピーチでも「未来を恐れず、過去に執着せず、今を生きる。」皆似たことを言っている。周りに「今を生きている」前高生は多い。中でも私の友達の A 君はこの研修のようなプログラムに何個も申し込んでいた。本当に素晴らしいと思う。また皆が知っているあの H 氏は去年のこの研修で進化したと思われる。話はまとまらないが、どちらにせよこの研修は価値がある。行けなかったとしても大学とかどこかのタイミングで海外に行つて欲しいと思う。必勝前橋。

VISION

石田 悠人

●研修行程を終えて

今日本に帰国して、参加できたことへのうれしさが大いにある。が、行く前はここまで触発されるとは正直思わなかった。この気持ちは経験した人にしかわからないのは確かであり、ここで伝わりきらないとは思いますが、今の思いを書いていく。

●スペインからの小中学生との交流

彼らとは Berkshire College での2日間、偶然居合わせ、夕食やその後にわずかながら交流した。彼らと交流したことで、日本を再度見つめ直した。彼らは最初の交流時から高校生の僕らを圧倒するほどの元気に満ちあふれていた。あの勢いはおそらく日本の子供にはない。少し大げさかもしれないが、民族間の雰囲気の違いを垣間見た気がした。しかし明るいことが完全によいとは限らない。僕は日本人として潜在的に持つ傾向の上に、彼らのよいところを吸収できたらいいと思う。僕は特に高校に入ってから、目標達成のために全力を尽くそうと思うあまり、自然と自分の殻に閉じこもり、そういう自分に慣れてしまっていた。そのためノリやはじけることが必要な彼らとの交流に、とても戸惑った。一方彼らはどんどん僕らに話しかけ、その姿勢があったから最後は仲良くなれた、といっても過言ではないと思う。この経験から、笑顔と相手に心を開いていく姿勢の大切さを感じた。相手により印象を与え、コミュニケーションを円滑にするためには必要不可欠なことのよう思う。スペインからの彼らと居合わせたことに感謝したい。



●紅林さん、岡本さんの講演

ほかの報告書にもこのお2人のことは書かれていると思うので、ここでは基本的な情報は省かせてもらいたい。まず思い知らされたのは、2人と僕の決定的な違いは行動に移すかどうかである、ということだ。紅林さんは、そのときはその重要性があまり見えなくても、目の前のことに努力することが、気づかないところで自分の武器として役立って、未来の自分を形成している、と語った。岡本さんは、物事の本質を考えろと言う。例えばグローバル化とは何か、物や人の自由な行き来とはどういうことかを突き詰めて考えなければならない、と。僕にとってこの考えは真新しいものではなく、思考や経験の深さはないにせよ、わかっていたことだった。でもそれを実生活に移せていなかった。なぜなら、実際にグローバル化の説明はできず、同じように言葉として使っているだけできちんとした理解がないものが数多くあるからだ。気づいたら行動するということは、自分に欠けていることだと改めて痛感した。でもその行動がなければ何も変わらないし、後悔するだけだ。意識的に変えていく、と決意した瞬間だった。



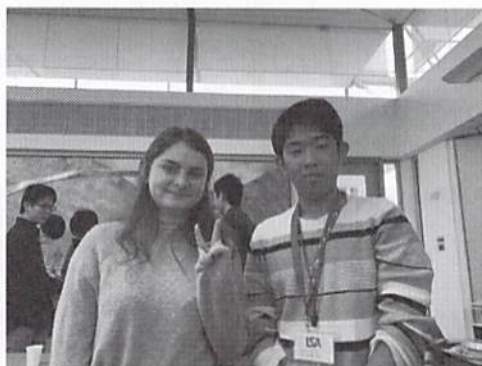
●Oxford、Cambridge 大学の見学

どちらの大学でもその施設の大きさ、充実さには驚きを隠せなかった。純粹に憧れを持ったし、世界各国からの学生たちが、誇りを持って学んでいる姿を見た。街の散策や説明なども現地の学生にやってもらい、貴重で魅力的な見学だった。このとき感じたのは、リアクションの難しさだ。今後さらに英語力を伸ばしていくなかで、それとともに意識しておきたい。



●Cambridge 生との交流

僕にとって彼ら5人との交流が最も印象的で、意義あるものだった。僕たちも英語での会話に慣れ、滞在の終わりが見えてきていて、ひとつでも多く何かをしたいという気持ちがどんどん膨らんでいた頃だった。ここでやったこと、学んだことはたくさんあるが、ここでは2つについて書く。



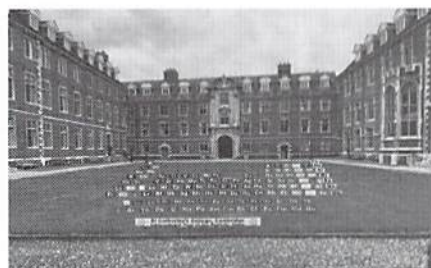
学生の1人に、エミリー・グリーンさんという人がいた。彼女は考古学を学び、土偶に興味があるという。僕は歴史に興味があり、小さい頃は考古学者になりたいと思っていたこともあったので、考古学について何度か話しかけた。志望大学の話のなかで、「その大学に入学したら、そこの知り合いを通じて是非連絡を」と彼女は言った。実は最初にこれを言われたときは聞き取れなくて、とても悔しかった。だからその後、もったきちんと会話したいという思いで話し、最後の感謝を伝える機会でも、彼女に言いたいと志願した。それは

ともかく、この言葉から、自分が思っている以上に世界は近く、つながっているということに気づき、とても魅了された。各国・世界の最高峰の大学が学問を共有していることを想像するとわくわくした。そしてそのとき、自分がなりたい未来像がはっきりと見えた。聞き取るのに苦労するのを、親切に最後まで伝えようとしてくれたこと、多くを学ばせてもらったことに、直接でも伝えましたが、彼女に対して今改めて感謝を表したい。それでも、考古学についてもっと話げたのではないかと後悔する自分もいる。この気持ちを今後の過ごし方や、自分の力の向上につなげていけたらと強く思う。

もう1つは、最後に行った前高生 vs Cambridge 生のディベートだ。これは自分たちで考え提案してもらい実現したことで、本当に貴重な経験となった。もろもろは省くが、彼らは論理的に、多方面から事象を捉え、かつ具体例を挙げてわかりやすかった。能力の高さに圧倒されつつも、濃密な、楽しい時間だったことは間違いない。

●これからへ

ここに書き尽くせない挫折と悔しさ、喜びがある。この研修は楽しさを味わうものではない。自ら描いた明るいVISIONに向かって、感じた思いを胸に、今はやるべきことを地道に不器用に、もがきながら続けていくことを強く決意している。



Oxbridge 研修を終えて

碓氷 創平

英語の本質とは、英語を話す人たちとコミュニケーションをとることだ。いつからか私の中では、入試において文系理系のどちらであっても効力を発揮するといわれる、勉強して損はない万能な一教科になっていた。他の教科だって、何のために勉強なんかしなくてはならないのか。そう思えて仕方がなかった。高収入の職について、安定した給料を得ている将来の自分はどこか窮屈に思えて、何か夢のある職業に就きたいと考えて、真面目に机に向かって勉強することは貴重な今を有効に使えているのか不安になって、はたまた単純に勉強が嫌いだけだったりして。今回の研修は、この人生上大きな問いに、答えを与えてくれた気がする。もし私が英語を使いこなすことができたならば、私はこのイギリスで、道を行く皆と話げたのだ。何に使おうか迷いながら今まで勉強してきた英語では、せっかくオックスフォード生が、ケンブリッジ生が、その他のアクティビティで一緒に活動してくれた人々が、私に伝えようとしてくれた数々の大切な話を、ボロボロと聞きこぼして周りに日本語で聞くことしかできなかった。明日こそは聞き取ろう、明日こそは。そう思っている、一週間じゃそんなに大きな変化はない。英語の語彙も、リスニング能力も、到底及ばないことを痛感してしまった。激しい無力感と焦燥感を覚えたことは言うまでもない。しかしそれは、今回研修に行き得た大きな収穫だった。勉強する理由ができた。勉強をして広がった知識は、どこかで必ず使えるのだと実感できた。

研修に行くにあたって、楽しみだったことは、ロンドンの景色だ。建物全てがお洒落で、細かなところまで装飾が施されていた。煉瓦で作られている建物が多く、1~3日目に宿泊したパークシャーカレッジも、煉瓦造りだった。どこを撮っても良い写真を撮ることができた。右はその中の一枚である。写真撮影時のこの日のロンドンには、雨上がりの純色のスカイブルーに赤や黄色のカラフルな建物が映えていた。イギリスに SUBWAY (サンドイッチ) や McDonald's を見つけた時は、どこか親近感が沸いた。



「生きざま研修」とは何だ。私の場合生きざまとは、カッコいいと思う姿だ。細かく言えば、潔い発言が的確だったり、何かに真剣だったり、日々の困難と闘っていたり、応用の効く知恵があったり、感情に素直に生きたりすることだ。自分を把握し、自信を持てるようになることだ。このように生きるのは中々難しい。なぜなら、やることがたくさんあるから。周りに冷笑される。孤独になりたくない。続かない。面倒くさい。届かない。大変だからと妥協するための理由は、山ほどにある。自分を表現することよりも、出る杭にならないことの方が重要視される。世知辛い世の中だと過剰に思い込んで、自分で創造した恐怖に圧倒されている。そう悲観的になっている私に、この研修は大きな影響を与えた。この研修で参加者たちに求められていることはずばり、チャレンジすることだ。初めて会う人に話しかけて、相手を少しでもわかってもらうことだ。外の世界にアタックを仕掛ける練習。いかに世界が広いかを紅林氏、岡本氏、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学をこの目で見て体感し、一步踏み出そうという勇気を得る。それが「生きざま研修」であると、私は確信する。実際、共に研修に参加した皆は、

挑戦を続けていた。自分だって置いて行かれるわけにはいかず、文法なんか気にすることなく話しかけて、相手の発言を理解しようと必死だった。それこそが研修の意義である。そうして何とか食らいつこうとしているとき、「今日はしっかりと生きた。」と思えて、とても嬉しかった。それは、日々を何となく過ごしがちな私の毎日に、大きな刺激を与えた。研修中、この高揚する気持ちが、日本に帰ってまた普通の生活に戻ることで消えてしまわないか不安だった。でも途中から、そんなことすら気にせず、研修期間をがむしゃらに終えようと思えた。そこに、ささやかな誇らしさを感じている。

共に研修に行った仲間からも、大きなインパクトを受けた。自分でチャンスを作って大道芸を披露する者、英語を駆使して積極的に話しかけに行く者、場を盛り上げる者、時間をより良く使おうと議論する者。着実に力をつけている、または挑戦をする仲間と自分を比べたそのギャップに、毎日夜部屋に戻ってから身悶えした。それは「負けた」という悔しさでもあり、自分もそうなりたいという尊敬でもあった。それ故に、皆と話がしたいと思った。将来の夢は？特技は？趣味は？母語である日本語で話をした。自分もいつの日か追いつくことができるのだろうか。紅林氏、岡本氏、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学に対してだけではない。自分のすぐ近くを見てもその不安を抱く。そんな視点で日本に戻ってみれば、日本でも同じ不安を抱いている自分がいる。しかしそれは同時に、目指すべき目標という名の沢山の仲間が同じ教室にいるということでもある。このことに気付くきっかけとなったこのOxbridge研修は、最高のものになったと言える。最初の文に回帰する。英語の本質とは、英語を話す人たちとコミュニケーションをとることだ。もし英語を使いこなすことができたなら、そんな素晴らしい人々を、世界中で探すことができる。これからの毎日に、また少しバイタリティーが戻ってきた。

最後にISAの遠井さん、引率の中村先生、26人の仲間、この研修に関わって頂いた先生方と、イギリスで出会うことのできた全ての方々に感謝を申し上げて、研修報告書とさせていただきます。(2019/03/27)



●はじめに

私は中3の頃に Oxbridge 研修の存在を知り、5月の先輩たちの報告会を聞いて少し興味を持った。しかし、説明会などで Oxbridge 研修は別名「生き様研修」で過密なスケジュールをこなさないといけないことを知り「自分には無理なんじゃないか?」と不安を覚えた。最終的には Oxbridge 研修に参加することを決め、今こうして報告書を書いているわけだが、ここまでたどり着くことができたのは両親の存在がとても大きい。両親は2年間アメリカ合衆国メリーランド州に留学した経験があり、他国の文化を学ぶことや、日本との生活の違いを身をもって実感することの大切さを教えてくれた。また、吸収力の高い学生うちに海外研修に行くことで、海外での経験や体験がその後の人生にとってかけがえのないものとなると私に参加を勧めた。私はこの言葉を受け、参加することを決意した。

●スペイン人との交流

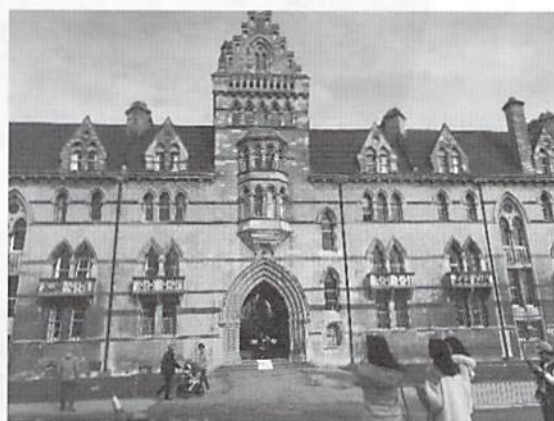
Berkshire College に着き、やけに賑やかだなあとと思ったら、クリケットというスポーツ関係でたまたまスペインの小中学生が同じ施設に来ていることがわかった。1日目の夜と2日目の夕食のときに彼らとアクティビティをして楽しんだり、会話などをして交流した。イギリスに来てから初めてきちんと英語で会話したので、聞き取れないことが多かった。また、会話がなかなか続かなかったので1日目が終わった夜、どうすればもっと自分に興味を持ってもらって楽しく会話ができるのか考えたところ、



あるものを思いついた。私は大道芸部に所属していて、ジャグリングの道具を持ってきたのだ。2日目、ジャグリングを見せたところ大受けで、たくさんのスペイン人と話すことができた。同時に、相手の英語をきちんと聞き取り、こちら側からも相手が聞き取りやすいように大きな声で話せば英語でコミュニケーションをすることができることも感じた。今思うとこのスペイン人との交流が、Oxford と Cambridge 生との交流のときに大きく活かされたので彼らには感謝したい。

●Oxford 生との交流

今回 Oxbridge 研修のために来てくれた Oxford 生は、Oxford 大学を案内してくださった方2名を含め8名で、そのうち3名が日本人だった。将来の夢やこれからのことはもちろん、勉強の仕方なども質問した。勉強面については、世界トップの大学に通う Oxford 生からおすすめの勉強法を直接聞いたので大変有意義であった。Oxford 生と交流して一番印象に残っていることは、全員将来の夢がとてもはっきりとしていて、誰一人目的なしに Oxford 大学に通っていないということだ。この研修に参加して

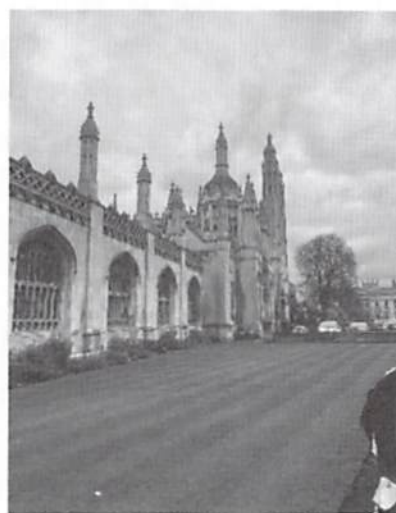


初めて肌で「これが生き様なんだな」と感じた。私の夢は決まってはいるが、形だけでまだぼんやりとし

ている。だから、日本に帰ったらもっと自分の夢について調べて、Oxford 生のような夢の持ち方をしようと思った。今回の交流は、自分の将来の夢の考え方や目標の持ち方を大きく変えるとても刺激的なものとなった。

●Cambridge 生との交流

Cambridge では、Cambridge 大学を案内してくださった 5 名を含め、計 11 名の Cambridge 生にお世話になった。Cambridge に来て最初の日は Cambridge 大学を見てまわった。Cambridge 大学は建物の雰囲気は Oxford 大学と似ていたが、周囲の風景が Oxford 大学よりも落ち着いていたため、とても過ごしやすそうに感じた。Oxford 大学のときと同様、大学の持つ歴史の深さや建物の造形美に圧倒された。また、サイエンスフェスティバルでは普段の生活ではかかわりが少ない心理学と考古学を見てまわった。Cambridge 生一人一人の研究内容はとても深く、興味が湧かないという研究は無かったほど面白かった。最終日では、Cambridge 生と「学校は男女別学にすべき」という論題



に前高生は賛成側、Cambridge 生は反対側となった。人数はこちら側の方が圧倒的に多く、実際に男子校なので意外といけるんじゃないかと思った。だが、自分たちが述べたことを簡単に覆してきた。なぜかという、Cambridge 生の持つ広い視野に私たちの視野は及んでいなかったからだ。広い視野から生まれた考えは、凡人の私では到底思いつかないような発想であり、そのような発想ができる広い視野を持っていることをとてもうらやましく感じた。ここでも Oxford のときのように「生き様」を感じた。今回の Cambridge 生とのディベートは、人生の中で唯一無二の経験となり自分の持つ視野の狭さを気づかせてくれた。これからは、もっと広く大きな視野を持って生活していきたいと思った。

●まとめ

Oxbridge 研修に参加して、私の根本的な考え方が変わった。紅林さんと岡本さんらの経験談はとても心に響いた。私は個人的に、経験に勝るものは無いとっていて、人生の大先輩にその貴重な経験を生で聞けたことは本当にうれしかった。また、2 人の講演だけでなく、現地の人々に自分から積極的に話しかけられたことで、Oxbridge 研修参加以前よりも積極性が増し、色々なことにためらうことなくチャレンジできるようになった。次の第 6 回 Oxbridge 研修に参加する生徒はこれだけは忘れないでほしい。それは、Oxbridge 研修はイギリスに行って終わりではないということだ。イギリスに行って生き様を肌で感じるだけでなく、日本に帰ってからもその生き様を絶対に忘れないで報告会や学校内外活動など様々な活動を通して出力・発信してほしい。そうすれば、イギリスで感じた生き様を忘れることなく、日常生活に大きく活かすことができるのだ。

最後に、引率してくださった中村先生、事前研修でお世話になった加藤先生、ISA の方々、一緒に研修に参加した仲間、研修参加を後押ししてくれた家族、自分たちを支えてくれた方々、本当にありがとうございました。

● はじめに

自分にとって初めての海外での生活は、それまで想像もしていなかったたくさんの学びと発見にあふれ、今後の人生の支えとなる貴重な経験を与えてくれるものでした。また、「生き様研修」というこの研修のサブタイトルにもあるとおり、今後の人生にどう生かすかを考えることができました。

この報告書では、私が現地での研修の中で印象に残ったことや、自分自身について考えたことなどを書いていきたいと思います。

● 研修参加の動機

私がこの研修に参加しようと思った理由は主に二つありました。一つ目は、世界の第一線で活躍している方々のお話を直接聴けることにとっても魅力を感じ、自分自身の将来について具体的に考えるきっかけにしたいと思ったからです。二つ目は、会ったばかりの人との会話に消極的だった自分を変えたいと思ったからです。現地の大学生との交流やセッションなどを通して、自分から会話を持ちかけるコミュニケーション力を身に付けたいと思いました。その中で、これまでに自分が身に付けてきた英語が、実際の英語圏の国においてどれくらい通用するかを試してみたいと考えました。

● 現地での研修中に考えたこと・学んだこと

○ロンドン市街の見学

ロンドンでは、バッキンガム宮殿、ウェストミンスター寺院、大英博物館などを見学しました。日本とは全く違ったイギリスの街並みや風景に感動しました。テレビや本でしか見たことのなかった有名な観光名所をたくさん見ることができ、イギリスに住みたくなるほどワクワクしました。見学中に感じたことは、事前に下調べをすればするほど良い見学になるということです。特に大英博物館では、ロゼッタストーンをはじめ、古代エジプトやメソポタミア、ギリシア文明やローマの古典文明などの展示物がたくさん見られます。1年生の世界史で学習と大いに関係するものばかりだったので、世界史の学習内容を振り返ってにおいて良かったと思いました。何も調べずになんとなく行くのよりも、案内をしてくださる方のお話が何倍も面白いものになったと思います。

(ウェストミンスター寺院→)



○紅林秀和さん・岡本尚也さんの講演

研修2日目の午後に、イギリスを拠点に研究をされている紅林さん、岡本さんの講演がありました。講演から学んだことは、「身近な課題を見つけること」、「具体的なプロセスを考えること」、「新しいことを学ぼうとする貪欲さ」の重要性でした。「過去にそんなに価値はない。どんな将来を描き、何に情熱をもち、それに対して何ができるか」「肩書き(過去)を失ったときに何で勝負するか」このように紅林さんはおっしゃっていました。社会に出てから必要とされる人間は、何を勉強し解決するかを考えられる課題抽出力を持っている人、新しいことを学んで使えるスキルのある人である。いつまでも過去にすがっ

ているのでは成長はない。このようなことを伝えていただき、「ああ、これが生き様研修なのか」と感じました。紅林さんと岡本さんのお話から伝わってくる自信と熱量にとにかく圧倒され、紅林さんからの言葉である「俺のこれ、世界レベル」といえるものを持つ人間になりたいと思いました。

○オックスフォード大学・ケンブリッジ大学での研修

オックスフォードではドイツ出身の学生の方に大学を案内して頂きました。壮大な教会や講堂の美し



(↑マリッサさんと)

さに圧倒されながら、大学の歴史や現在について説明を聞きました。また、オックスフォード生の方々とのセッションでは、様々な国からオックスフォードに来た学生の方々から学生生活や勉強についてお聞きすることができました。オックスフォード生の高校時代の経験談を聞いたり、事前に考えておいた質問に答えて頂いたりして、たくさんの学びのある一日でした。高校生の時にやるべきことは何か、それはなぜ必要かなど、努力の天才の方々から学んだことを心に留めておきたいと思いました。

ケンブリッジでは、まず班ごとに大学内を案内して頂きました。ケンブリッジ生のマリッサさんと一緒に、いくつかのカレッジを見て回りました。マリッサさんからも、ケンブリッジで学ぼうと思った理由や将来の夢などを聞くことができました。

● 最後に

ここまでいくつかのことについて書いてきましたが、報告書の文章では伝わらないことがまだまだたくさんあり、この報告書に書いたことは研修の中身の数パーセントにも満たないと思います。

研修に参加する前と後で大きく変わったと感じるのは、「積極性」と「思考力」です。例えば食事の場面で大学生の方々に会話を持ちかけたり、相手が言おうとしていることを粘り強く考えたり、そういった能動的で前向きな姿勢が身に付いているのを研修が進むにつれて実感しました。また、聞き取った英語の意味がわからなくて何度も聞き返したり、自分の考えていることを英語にして伝えようと努力したりしている友人の真剣な姿を見て、自分も負けていられないとたくさんの刺激を得ることができました。自分にとっての「生き様研修」は大成功だったと、自信を持って言えると思います。

最後になりますが、イギリスでの研修でお世話になった大学生の方々や講師の方々、また、研修に参加する準備の段階からさまざまなところで協力してくれた両親、引率の中村先生、事前研修でお世話になった大栗校長先生や加藤先生、クリス先生をはじめ前高の先生方、そしてたくさんの場面で心強いバックアップをしてくださった遠井さんをはじめISAの皆様に、心から感謝申し上げます。



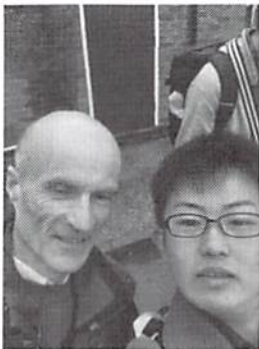
●参加理由

私は小学生の時にグアム旅行の経験があった。公用語は主に英語だと思うのだが、多くの日本人の観光客が来るためか、現地の人々は大体日本語を話せたため、英語を使う機会が無かった。だからこそ現地で自分の力を試したかった、というのが理由の一つだ。あとは、いろんな人たちの「生きざま」を学んでみたいとか、有名大学の学生と話してみたいというような他のメンバーと同じ理由なので割愛する。

●失敗だらけの準備・1～2日目

私は英語が好きであったが、特別できるというわけではなかったため、他の参加者に比べ英語の知識もスキルも劣っていた。だからこそ準備はしっかりしておくべきだったのだが、十分ではなかった。みんなが折り紙やらけん玉やら持ってきて、向こうで聞きたいことをはっきり決めていたことにすごく焦った。来年参加するみんなには事前の準備をしっかり行っておくことを強くお勧めする。

パークシャーカレッジに着いた後、担当の人が何かを説明していた。「ペラペラペラ…」(ん?え??)「…ペラペラ。OK?」「OK! (だめだ、全然ワカンネー)」本当にこんな感じだった。その日の夜スペインから来た子供達と交流があった。初対面だったこともあり自己紹介だけで何とか乗り切れた。



次の日、午前は大英博物館をはじめ、市内観光をした。午後は紅林さん、岡本さんの講演だった。この講演で紅林さんが言った「常に厳しい道を選ぶ」という言葉はいつも楽しがちな自分の心に突き刺さった。夕食時に昨日のスペインの子供達ともう一度かかわる機会があったのだが、質問しても何を言ってるのかわからない、といった反応をされ、みんなの注目は小道具でパフォーマンスする、もしくは英語ペラペラなメンバーの方へ…挫折を味わい、そして悔しかった。これからどうすればいいんだ、そんな事を考えながら床についた。

●変わり始めた3日目

オックスフォード大学内を案内してもらいながら「やっぱり本物見るって大切だよな」なんてぼんやり考えていると案内していた Suzana さんから話しかけてくれた。無我夢中で答えたのを覚えている。そしてそのまま勢いでクリス先生に話しかけ、短いながらも会話できた。その後の自由時間ではおいしいような飲食店を見つけ、散々迷ったが注文してみた。イギリスはカレーにヨーグルトソースかけて食べるのがベターなんだろうか。そして、オックスフォード生と交流会。将来の夢やより良い学習環境のためなら国境をも超えていく姿に大変感動した。今日だけでもかなり自分の殻を破れた気がした。



●駆け抜けた4日目～

お世話になったパークシャーカレッジを離れ、研修の場はケンブリッジ大学へ。班ごとに一人大学生がついて案内してくれ、一緒に写真を撮ったり、話しかけたりできた。会話することへの恐怖心はもうほとんど無かった。その後のサイエンスフェスティバルを楽しみつつ、大学内の露店でまた食べ物を頼んでしまった。どうやら私は自由時間になると食い意地が張る性分らしい。夕食では幸運なことに自分の席の目の前に学生が座ってきたため自然に会話できた。

5日目、スピーチにおける6ポイント（反復・声の大きさ・トーン・スピード・ジェスチャー・アイコンタクト）を学び色々なトピックについて意見交換した。なかにはEU離脱（Brexit）などの難しい話題もあったが、それなりに意見を伝えられた。自分の言いたいことを相手に理解してもらえたことが何よりも嬉しかった。

6日目、スピーチの発表（若干アドリブを入れられた）の後ケンブリッジ生からのプレゼンテーションとケンブリッジ対前高のディベートをすることができた。また、最後にお世話になった学生に感謝の言葉として私はダニエルさん（好きな寿司ネタはマグロ）へあいさつした。伝えることの楽しさや大切さが身にしみてわかった一日だった。

その後は帰国メインなので割愛する。



●まとめ



自分に自信を持ってなくて積極的なことなんてできない、そんな人こそこの研修に参加してほしい。あるケンブリッジ生から直接聞いたのだが、高校のはじめ、テストで点数が取れなかったがこの大学に入りたいからと猛勉強して入ったそうだ。努力さえすれば結果はついてくる。でも一步踏み出すのはいつだって勇気がいる。それでも自分の殻を破れたなら違った世界が、新しい自分が見つけられるだろう。この研修で自分はたくさん失敗してたくさん挫折した。しかし困難と向き合う力や一步踏み出して自分を発信する楽しさを得ることができた。誰しもが自分で自分の道を切り開いてゆけるのだ。た

だちょっとしたきっかけが必要なだけ。もしかしたらこの研修がきっかけになるかもしれない。

最後に、この格言を自らとみんなに送ろうと思う。

" You miss 100% of the shots you never take."

" 打たないシュートは100%外れる。"

（カナダのプロアイスホッケー選手の言葉）

何事もやってみなくちゃ成功しない。

人生楽しんで逃げたら損だから。



●研修概要

- ・ スペイン人の小学生との交流。
→非常に活発で、英語ペラペラで初日から圧倒された。
- ・ ロンドン市内見学。 →大英博物館、
バッキンガム宮殿等、観光スポットを訪れた。
- ・ 紅林さん、岡本さんのお話。



☞・ Oxford 大学見学。

・ Oxford 生との交流会。

・ Cambridge 大学見学 ☞

・ Cambridge 生と交流会。

→英語でのスピーチ、
ディベートをした。



●成功者の生き様

研修初日のバスの中、私たちは研修を成功させるための目標を一人一人掲げた。その内容の大半は、積極的になる、というようなものだった（ちなみに私もそのような事を話した）。しかし、“積極的に”なんて言葉はいわゆるマジックワードで、あまりにも抽象的であった。積極的にとは、具体的に何をすれば良いのだろうか。

私達は、研修2日目に日本人で Oxford 大学出身の紅林さんと、岡本さんからご講演頂いた。そこで私が最も感銘を受けたのは“茨の道を選ぶ”という言葉だ。人生に成功している人のそれまでを振り返ると、そこには数々の自分にとって厳しい環境の選択があったことを知った。そこで私は考えた。積極的になるとは、進んで辛い道を選択することなのではないかと考えた。もう一つ、私の記憶に焼き付いたのが“目の前のことに従事する”という言葉だ。私は頭の中では理解した。ヒトは生きていく中で、数え切れない程の選択を迫られる。身の回りの些細な選択から、自分の人生に関わる大事な選択まで。成功への近道は、自分に降りかかる一瞬一瞬の選択で、常に厳しいルートを選ぶ事なのではないかと私は考えた。

私は自分の中でまた一つ目標を立てた。迷ったら何も考えず手を挙げる。私は元来マイナス思考が強く、自分に自信が持てない性格であったため、何かやってみたい事があっても失敗に終わる結果ばかりを想像して躊躇してしまう事が多くあった。つまり、自分にとって楽な道が無意識に選択していたのである。しかしそれは本当にもったいないことであると再認識した。だからこそ自分の思いつき、可能性を重視しようと考えた。思い立ったが吉日。そんな言葉を頭に思い浮かべた。私は実際に研修中もいくらか行動を起こすことが出来た。それだけで自分の殻を一つ打ち破れた気がした。

●自分という存在の小ささの発見

Oxbridge 研修に参加できた事のメリットの一つは、自国に留まらず世界に目を向けて勉強、研究しているたくさんの人と接する事で世界の大きさを知り、逆に自分という存在の小ささを知れた事だと私は考える。日本にいる間は絶対に出来ないような発見や、新たな興味関心を得ることが出来た。また、自分たちが関わった学生達は皆、自分の野望のための強い信念を持っていた。哲学、考古学、言語学など、自分はこれを勉強したい、という気持ちが強かった。

私は哲学を研究している学生に、何故哲学に興味を持ったのか、という質問をした。(その他の人にも同じような質問をした。)理由は意外とシンプルなものが多かった。自分の経験の中で起こった疑問や興味など、自分の身近な事への興味関心が彼らをここまで動かしているのだ。今回の研修でわかったことは、自分はもっと色々な事への関心を持ち、もっと多くの人生経験を積むべきだという事だ。自分の将来への視野を広げられるよう、色々な事に挑戦していきたいと思う。

●身の回りのことへの配慮

私達は今回の研修で、引率していただいた中村先生に繰り返し言われたことがある。それは“気づけ”という事だ。はっきり言って自分たちは身の回りの事に非常に鈍感であった。中村先生に何度も注意され、自分の周り、そして他人の周りにもしっかりと目を配り微量ながら気遣いが出来るようになっていった。私達は少なくとも、少しは大人の言うことに何かと反発したくなる幼稚な心をもっているのではないだろうか。そんな時こそ本人の意図をしっかりと把握し、その人の思い、本心に気づかなければいけないと思った。周囲に鈍感な今の私をしっかりと受け止め、これからも変わっていく努力をしていこうと心に決めた。

●英語でのスピーチ

ケンブリッジ生にスピーチの指導をして頂いた。

スピーチをする上で重要なことを丁寧に教えて頂いた。私が難しく感じたのは、発声と手振りと目配りの3つの動作を同時にするという事だ。更に声のトーン、抑揚までつけなければいけないと考えると、頭がパニックになってしまった。それでも一つ一つケンブリッジ生に指導して頂き、繰り返し練習したら私達も少しは上達した。この経験は本当に貴重な物であり、自分の自信へとつながるだろう。私は、社会で起きている障害者差別についてのスピーチをした。決して完璧ではなかったが、ケンブリッジ生、そして前高の仲間の前でスピーチが出来たことは生涯の財産になった。

最後に…

7日間を通して本当に楽しかった。この研修は大成功に終わったと言えるだろう。新たにたくさんのかげがえのない仲間が出来た。海外の優秀な学生と交流が出来た。異国の文化、歴史に触れる事ができた。何が一番印象的か、と聞かれたら選べずに困るくらいだ。そんな濃い7日間だった。この研修に携わった全ての人に感謝を述べたい。ありがとうございました。



研修の価値

小野 颯人

●はじめに

私は中学生の時にアメリカでホームステイをしたことがある。ホストファミリーをはじめとした、現地の人との交流は、決して満足できるものではなかった。Oxbridge 研修への参加は、ある種のリベンジのようなものだった。

●アドバイス

以下、個人として実際に行ってきた感じたことである。参考にしてほしい。

・飛行機と時差

約 12 時間という長めのフライトは、2 度目でもかなりきつかった。定期的に席を立ったり、9 時間の時差、早朝の学校集合などよく考慮して睡眠をとったりして欲しい。私はほとんど眠れず苦勞した。到着時点で瀕死状態なんてことにならないように気を付けて欲しい。

・服装

第 4 回の研修では雪が降るなどとても寒かったと聞き、コートやセーターなど厚手の服を持って行った。しかし、今回は、雨が降るなどはしたものの肌寒いという程度だった。結果、大量の服がスーツケースを圧迫し最終的にスーツケースの持ち手が壊れてしまった(かなり長く使用していたものではある)。次回、天気はどうなるのかはわからない。どんな場合でも対応できるように天気予報などチェックして、適切な準備をしてほしい。

・食事

イギリスは「世界一食事がまずい国」として有名であり、事前研修でもかなり強調された。だが、実際そんなことはなく、むしろおいしかった。後半に滞在した Kaetsu Centre(嘉悦センター)では、白米に味噌汁まで食べることができた。強いて言うなら、豆が多かった。気を付けて欲しいのは飲み物である。少し重い、スーツケースの中に入れる(破裂の危険はあり)、飛行機に乗る前に買うなどして飲料水を多めに持っていくことをお勧めする。飛行機の中で配布されたりするものもあるが、量が少ないと思われる。ポンド(£)に両替してもっていく際、多くの人はお札しかなく、自販機で飲み物(炭酸)が買えない。脱水症状気味の人も多かった。水分をこまめにとることは非常に大切だ。

・交流

まず、私の英語力はアメリカ英語とイギリス英語の差を感じられるレベルに達していなかったようで、特に違和感はなかった。リスニングに関しては速くてほとんど私には聞き取れなかった。ジョークが聞き取れないのが一番気まずかった。これは慣れるしかない。次に、移動のバスではとにかく前の座席を確保するのがよいと思う。なぜなら、クリス先生や、前半滞在した Ardmore のスタッフで最後まで同行してくれたオリさん座っているからである。バスの移動時間はかなり長い。睡眠も大切にしたいが、会話を選択できるとよいと思う。私はそれができなかった。最後に、質問や話のタネは毎年言われていることだが、できる限り用意したほうが良い。本来質問は用意するものではないと思う。その場で考えられるなら問題ない。ただ質問コーナーのようなものは本当にたくさんあった。せっかくの貴重な時間が無言で終わってしまうようなことは避けてほしい。

・持ち物

ウエットティッシュとボディシートはがあると嬉しい。

●研修を通して

冒頭に書いたように、この研修は、私にとっての「リベンジ」であった。この目標は、達成できた、とはいいがたい。コミュニケーションという面において、結局私は納得のいく挑戦ができなかった。チャンスはたくさんあった。まず、スペインの子供たちとの交流だ。彼らはとにかく元気だった。いきなり「コニチハ」「アリガトウ」を連発してきて面食らった。最初は勢いに押されぎみで、それが悔しくてスペイン語の挨拶を調べたりしたが、最後まで使うことができなかった。Oxford 生 8 人(うち 3 人は日本人)に質問する時間では、準備不足で質問をしようとしても言葉が出ず、日本語が話せる方には「日本語でいいですよ」とまで言わせてしまった。Cambridge 生による企画の間は多少話せたと思っている。クリス先生やオリーさん、Cambridge 生と移動中や食事の間少し話はしたが、基本的に話しかけてもらった。自分から、積極的に。その難しさはわかっているつもりだったが、本当に「つもり」だったことに気づかされた。



メインの目標は達成できなかったが、様々なものを見て感じることはできた。ロンドン観光ではその街並みに圧倒された。歩いている間ずっと写真を撮っていたし、ため息が漏れ続けていた。大英博物館では時間の関係でほとんど見学できなかったのが残念だった。このためだけにイギリスにまた行きたいと思った。Oxford と Cambridge の見学もまるで映画のワンシーンかのような光景が 360 度広がってい



た。ただ、サイエンスフェスティバルは失敗だった。これもまた圧倒的準備不足により、ほとんど何もできなかった。時間はたくさんあったが、どこに行っても参加の仕方がわからず説明は速すぎて聞き取れず、散々だった。全体的に幼稚園児くらいの子供連れが多かった印象を受けた。唯一しっかり見学したのが「動物学」の展示で、数えきれないくらいたくさんの動物の骨や化石、剥製があった。

●生き様

私はこの研修の名前の通り、Oxford や Cambridge の学生から、クリス先生から、本文では書かなかったが、講義をしてくださった、紅林さん、岡本さんから。そして、引率してくださった中村先生から、ISA の遠井さんから、なにより共に活動した 26 人の前高生から、というようにたくさんの方々から、その生き様 - 生き方や考え方 - を学び感じることができた。成功への努力や挑戦、思考などこれからの生活の糧としたい。

●終わりに

私はこの研修がたくさんのことに「気づく」「気づかされる」研修だと思っている。それは自身の英語力の低さだったり、日々の大切さだったり、1 人 1 人様々だろうが、Oxbridge 研修に参加した人間全員にそれはあると思う。せっかく気づいた「何か」を忘れないうちに、忘れないように、生きていきたいし、多くの人に発信していきたい。

この研修に関わった、すべての方々に感謝を。
本当にありがとうございました。



●志望理由

私は自己紹介をすることが苦手だった。自分は何が得意なのか、将来何をしたいのか、自分はどんな人物になりたいのか、といった問いに毎回詰まってしまうのだ。なぜそうなるのかというと、私は自身自身のことがよくわかっていなかったからだと思う。そして、この研修を知った私は世界トップレベルの大学であるオックスフォード、ケンブリッジで学ぶ方々に話を聞きたいと思った。なぜその大学に入ったのか、将来どういうことをしたいと考えているのかというようなことを問い、一流の人々の「生き様」を感じたいと思ったのだ。

●イギリス観光

イギリスに到着してバスで移動中にまず驚いたことは、日本の街とは景観が全く異なることだ。なんとといってもほとんどすべての建物がレンガや石でできている。どこを切り抜いてもインスタ映えしそう。また、公道を馬が走っている。イギリスでは道路で馬が優先されるらしく、誰もクラクションを鳴らすことなく、馬が通過していくのを待っていた。私も乗馬通学してみたい。オックスフォード・ケンブリッジ両校を見学したが、どちらも街全体が大学のキャンパスとなっていて、観光客で賑わっていた。数百年もの間この地で最先端の研究が行われてきたのだと考えると感慨深い。



よくイギリスのメシはまずいと聞くが、あれはもはや都市伝説のようなものだと思う。ほとんどの料理は美味しかったし、物足りないということもなかった。一番美味しかったのは露店で買ったトルティーヤ。(トルティーヤはメキシコ料理だが)

●紅林氏と岡本氏による講演

研修前、先輩から「紅林さんと岡本さんの話はめちゃくちゃ勉強になった。」と聞いていたので、私はこの講演にかなり大きな期待を抱いていた。そして、二人の話はそれをさらに上回った。二人の話の聞いていると、二人とも、イメージを具体化することに焦点を当てていたように感じる。紅林さんは、社会にとって必要な事や課題を抽出し、それに対して自分がどう行動できるか具体的に考えることが社会でうまくやっていくことの秘訣と話していた。また、岡本さんは「SDGsに取り組んでいる学校ほど伸びない。」と話していた。(ここでみんな苦笑いを浮かべていた。)後に中村先生も「岡本さんはSDGsをとりまく具体的な現状をもっと知る必要がある、という意味で言ったのでは。」と話されていた。抽象的な課題をより具体的に、身近なものにする。「大きな課題」を「小さな課題」に。この考えは、私の見識を大きく広げてくれた。

●ケンブリッジ生によるセッション

研修後半の五日目と六日目にはケンブリッジ生が主導となってセッションというか講義を行った。ここでは自分の目指すリーダー像について意見を交わしたり、スピーチをよりよくするための方法などを

教わったりした。どのプログラムもただ英語力を伸ばすだけでなく、自分自身のことについて考えさせられたり、世界的に問題とされていることを取り上げたりと、社会について思考する力も伸ばすものだった。さすがケンブリッジ生だと感じる。最後には予定を変更してもらい、前高生が研修中に発案したケンブリッジ生 vs 前高生のディベートを行った。結果は前高の負けだったが、自分たちの成長を示し、研修を締めくくるものとしては最高だったと思う。



●成長の実感

研修初日、私は早速不安でいっぱいになってしまった。実はバスでの移動中や寮に着いてからは、自分たちの紹介やお礼の言葉など、グループを代表して発言することを求められることが多かったのだが、私は一度も立候補することができなかった。二日目も、観光中にクリス教授やTAのオリーに自分から話しかけることができなかった。クリスらに積極的に話しかけ、なかよくしている英語の得意な奴らに嫉妬のような憧れのような感情を抱きながら、自分は悔しさにいっぱいだった。その夜はなかなか眠れなかった。悔しさが頭にこびりついていて、その反省から次の日はどう話しかけようかなんてことをずっと考えていたのだ。

三日目、ついに勇気を振り絞ってオリーに話しかけることができた。そこで何かが吹っ切れたのだろうか、それから先は積極的にいろいろな人に話しかけることができた。また、この日はオックスフォード生との交流があった。彼らはみな、明確な将来のビジョンを持ち、自分がやりたいことをするために生きているという感じだった。そして、自分が様々な「生き様」を感じ取っているうちに、自分のやりたいことを見つけることができた。当初の目的である「自分を知る」ということが少し達成できたわけだ。

●まとめ

この研修はまだ終わりではない。八日間で学び、感じ、考えたことを日々生かしていくことでこの研修はその価値を失うことなく、続いていく。私はこの八日間で自分自身のことを知り、自分が社会とどのように関わっていくことができるのか、自分は社会にどう貢献していけばよいかを考えることができた。次は、自分のことだけでなく、周りの人が考えていることや、周囲の人々を取り巻く環境や社会について思いを巡らせることが必要だと感じた。そうすることで自分が周りの人に対してどう接するべきかわかりやすくなり、自分にも周りにもいい影響を与えることができるからだ。そのためにも、いろいろな人から話を聞いて、多くの視点から物事をとらえるように意識していきたい。



最後に、引率をしてくれた中村先生に遠井さんを含む多くの方々、一緒に研修に参加した仲間達、そして家族に、心から感謝します。

●はじめに

こんにちは。いきなりですが冒頭のつまらないタイトルでがっかりしてしまったそのあなた。そんなあなたもハッと息を呑むような、素晴らしい体験をすることが出来ました。それを、出来事のジャンルごとに述べていこうと思います。拙い文章ではありますが、私が体験した数々の出来事から、その片鱗を感じ取っていただければ、幸いです。



●臨機応変な対応

現地では、想定外なことだらけです。例えば私たちの場合、初日、2日目とスペインの12歳の子供たちと同じ敷地内に泊まりました。そこで初日には急遽彼らとのオリエンテーションのようなものがあったり、3日目には食事を共にしたりしました。こうした急な事態でも、積極的に彼らとコミュニケーションを取ることで、達成感や、充実感を得ることが出来ました。これはあくまでも一例です。Oxbridge 研修は本当に想定外だけでした。そこで大事なものは、臨機応変な対応です。それをするかしないかでは、得られるものがかなり違ってきます。

●歴史ある街並み

現地では、日本と違い、大学が出来てそこに学生をターゲットとした店ができるのではなく、大学と街全体が一緒に発展してきており、どの建物も歴史を共に歩んできた趣を感じさせてくれます。Oxford 大学は約900年、Cambridge 大学はおよそ800年と、どちらも大変長い歴史を持つ大学です。想像してみてください。360°どこを見ても見たことのない建物だらけ。あの時の感動は、今でもかなり鮮明に思い出すことができます。あの感動を皆さんに伝えられないのは本当にもどかしいです。



●素晴らしい方々との出会い

この Oxbridge 研修では、講義やセッションの機会が多くありました。例を挙げると、2日目、3日目の Oxford 大学 Chris 先生からの講義。この講義では、英語を平坦に読みがちな私たちに「どこを強調するか」を様々な会話の例を用いてわかりやすく教えてくださいました。次に2日目の紅林さん、岡本さん（両者世界で活躍されている、Nature 掲載など）の講義、質疑応答。ここで私たちが教わったことを要約すると、「未来を見据えて行動しよう」「マジックワードでごまかさないとことん追求していこう」



「自分を厳しい環境に置き、向上させよう」ということでした。特に心に残ったのは、マジックワードについての話です。確かに、探究学習（総合）のポスターなどでは、ふわふわして内容がない、されどそれゆえに批判もできないようなそんな文章が多く見受けられました（自分も含め）。この話を聞き、探求学習に少し面白さを見出せるようになり、それらを見る目、それらに対する意識ががらりと変わりました。次に3日目の Oxford

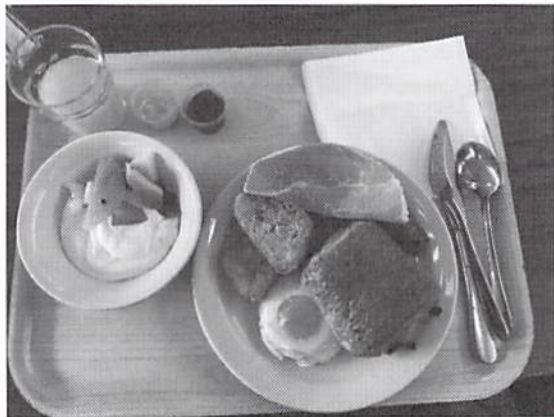
大学(院)生との交流会です。ここでは主に私たちの質疑応答が中心でした。質疑応答はグループ形式で行われ、私は自分の将来についてのアドバイス、Oxford大学の長所などについて伺いました。優秀な大学生たちに直で話を聞けるとあり、私が最も楽しみにしていたイベントでしたが、想像以上に素晴らしい時間となり、あっという間に時間が過ぎてしまいました。5、6日目のCambridge大学生とのEmpowerment Programでも、セッションに加えて質疑応答の時間があり、ここでもOxford大学の時と同様とても有意義な時間を過ごすことが出来ました。私が大学生たちに聞いて最も大事だと思ったことは、「他人から抜きんでるくらいに得意分野を伸ばす」ことです。私が「海外の大学院に行くにあたって大事なことはなんですか。」と聞いたところ皆口をそろえて、「英語もとっても大事。でもそれ以上に、何かを極めることだね。」とっていました。また、初日、二日目にあったスペインの子供たちは、とても、とてもエネルギーにあふれていて、生まれてから見てきた人たちの中で一番元気でした。どんどん私たちに話しかけてきてくれたので、それに刺激されて私たちも「もっと積極的に話しかけよう。」と思うようになりました。



●「生き様研修」としての成果

このOxbridge研修の大テーマはご存知の通り「生き様研修」です。私が多くの人の生き様を見てきたうえで強く思ったのは、「なるべく後悔しないように、今できることを精いっぱいやろう。」ということです。Oxfordの人たちもCambridgeの人たちも、みんな、生き生きと生活しているように見えました。私は、ただだと、惰性で時間を過ごしてしまう時が多くあります。将来、「あの時もっと勉強をしっかりとしていたらな。」や「あの時もっといろんなイベントに参加していたらな。」という後悔のないように、勉強にしっかりと励んだり、校外の様々なイベント(〇〇オリンピックなど)に取り組んでいったりしたいと思います。

●その他(注意事項など)



話は変わりますが、みなさんは「イギリスはご飯がおいしくない。」とよく耳にするかもしれませんが(少なくとも私の場合は複数の人から言われました)。でも、実際には私の滞在したArdmore language schoolとKaetsu Centreでは、いろいろな種類の食事が出て飽きることなく、味も良かったです。また、Kaetsu Centreでは、日本食も出て、懐かしい味を楽しむことが出来ました。

●最後に

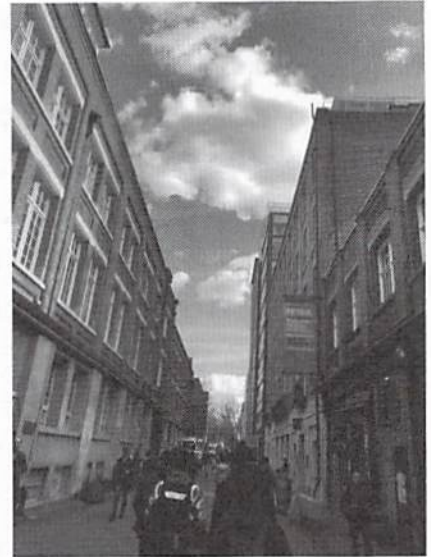
本当に申し訳ないのですが、実は、私はこのOxbridge研修に対して出発前少し消極的だった時期がありました(事前研修が面倒臭いと思ったこともあった)。でも、実際にイギリスに行ってみると、自分では信じられないくらい研修が有意義に感じられ、それまでかけてきた時間が報われたような気がしました。今、これを読んでいるあなた。もしあなたが少しでもこの研修に興味があるのであれば、絶対に行くべきです。必ず、あなたの人生の中でかけがえのないものになるはずです。

あなたは「何のために」学ぶ？

小林 史弥

●英語にあふれた環境に身を置く

参加動機というカッコいい言葉を使ってよいのでしょうか(笑)
今までに学習してきた「受験のための英語」がはたして海外の人たちにどれだけ通じるか試したい、また、英語圏という英語が飛び交う、むしろ英語しかない場所に自分を放り込むことで、何か自分にプラスになる経験をしてみたかった、という、自分にとってある意味**挑戦**を含む理由で応募をしました。



この研修は、あまりにも充実した内容だったので、書き切れない素晴らしい経験の全てを記すことはできません。また、この研修は**完全に自分が創る研修**なのでそこを理解していただくように、お願いします。それでは、ここから少し詳しく現地で行った活動について説明します。

●日本とは全く違う海外の雰囲気

イギリスに到着した1日目の夜、同じ宿舎に偶然泊まっていたスペインの子供たち(主に小・中学生)と交流する機会がありました。我々男子高校生が同じ空間に現れた瞬間、ものすごい勢いで彼女たち(女の子の方が積極的だった)は、『**トモダチ！！**』と話しかけて来て、いつの間にか僕は彼女たちと簡単な英語で話せるようになっていました。今考えると研修初日にとんでもないことを経験できたと思います。

また研修の中には、Oxford や Cambridge の街での自由散策があり、もう毎回と言っていいほど、道行く人に“Where are you from?”と尋ねられ、だいたい**日本の話**で盛り上がりました。(寿司とか寿司とか寿司とか)少なくとも僕は日本でこのような経験をしたことがないですし、むしろ日本もこのような会話があふれる国になってほしいと感じました。

●Oxford の学生の感動的な話

このプログラムで僕は**人生最大の感動**を覚えた、と言っても過言ではありません。Oxford の学生と面と向かって話すことなんて初めてで、それはそれは緊張しましたが、僕が拙い英語で話しかけても明るく、丁寧に僕たちに語りかけてくれる寛大な心を持ち、もちろん超名門の Oxford ですからとんでもない量の知識と、考える力を持っており、話をしている最中でもしっかり伝わってきたのです。ですが、この



ような学生なら日本の高いレベルにいる人たちにも当てはまりそうですよね。でも彼らには、尋常じゃないくらい**自分が学びたいこと、自分が興味のあること**に対して**食欲**があったのです。そのような人たちと出会って、今自分が学びたかったり、熱中している物事がなく、たとえそれが何となく見つかっても、大して長い期間それに集中できるほどの意識を持ってない自分と照らし合わせ、これから僕がすべき行動がはっきりと分かりました。それ

から、英語を学ぶ理由について、いまひとつ理解が足りなかった僕に、彼らたちは、**英語は自分が興味のあるものを極めるために必要な“tool”だ**ということを教えてくださいました。これで納得できないはずがありません。完全に僕のこれからの英語学習に対する意識を向上させるきっかけになったのです。

●Cambridge 大学の留学生との奇跡的な3日間

研修の後半は Cambridge 大学の学生や留学生と、リーダーという存在について話し合ったり、良いスピーチの仕方について、今まで自分が考えていた、所謂、概念的なことに何倍も勝るような、実践的なことを教えてもらいました。実は、僕は定められた時間で行われたセッションよりも、**Cambridge 生と昼食や夕食の時間をともに過ごせた上**、そのときに沢山の話を聞けたということがとても嬉しかったのです。どれもが興味深い話で今でも思い出せるくらい、それくらい僕の中で印象が強く、夢のような時間だったなあと感じています。

(とてもとてもとても頭の良い学生さんたちと同じ空間にいられたあのときの幸せの感覚はいつまでも忘れないでしょう笑)



*ついでに記しておきますが、Cambridge 生とディベートをすると、こちらが何を言っても完全無欠な意見に返り討ちにaimします。**もちろん大敗しました！！**

●【この研修から得た何か】を今後の自分の人生においてどうつなげていくか

なぜタイトルをここまで強調したか、それは【この研修の意味】がどこにあるか考えたときに、僕は**研修が終わった後の自分自身の行動の中にある**と考えたからです。

正直、僕自身はこれまで、この先自分が、留学であったり海外で学ぶといったことはないと考え、それがあまり魅力的ではないと否定的な意見を持っていましたが、それを覆すくらい【留学】の素晴らしさを沢山の学生に教えてもらったので、今後自分の進路を定めていくときに選択肢が増えました。

また、僕にはまだはっきりとした**自分が学びたいこと、自分が興味のあること**が無いのでそれを見つけるためにいろいろなことを経験したり、勉強したりしていくつもりです。

今後の自分の人生につなげるとは述べたものの、考えられる今の自分にできることはこれくらいしかありません。ですが、この研修で自分の意識が変わったことは紛れもない事実です。決して安くは無い、この Oxbridge 研修に参加させてくれた両親に感謝しています。おかげでその費用の何十倍もの経験をすることができた、と自信を持って言えます。



この研修を支えてくださった引率の中村先生や ISA の遠井さん、加藤先生、そして5期生メンバーの皆に感謝の言葉を述べて、終わりにします。

ありがとうございました！！

Oxbridge 研修を振り返って

小林 雄太

● はじめに

この研修については、高校入学前から興味はあったものの、実際に参加するかは、最後の最後まで迷った。というのも、様々な人からこの研修がいかにかつなものであるかを聞いていたのである。しかし、この高校への進学を決めた一つのきっかけでもある Oxbridge 研修に参加できる貴重なチャンスを無駄にしたいとは思わず、この研修に応募した。事前研修を含め、様々な活動を通し、私は素晴らしい仲間たちと互いを高めあい、成長できたことを強く感じている。これから実際の研修内容について、またそこで考えたことについて少し書き出していきたい。

● ロンドン散策

研修2日目、私たちはバスでロンドン市内に向かい、市内を散策した。最初に見学したバッキンガム宮殿では、女王陛下が宮殿にいらっしゃることを示す王室旗が掲げられていた。イギリス議会は残念ながら改装中だったので Big Ben は見られなかったものの、Brexit（イギリスの EU 離脱）について審議が行われている最中なので、議会前に抗議活動をする人々がいたのが印象的だった。10 Downing Street と呼ばれるイギリス首相官邸や、財務省などが並ぶ官庁街を抜けると、トラファルガー広場に出た。ネルソン提督を記念する大きな柱が印象的だが、荻原君が信号機の特徴的な絵柄を指摘してくれた。ガイドの方に聞いたところ、毎年このあたりで LGBT に理解を示す行進が行われていて、それを記念して作られた特別な絵柄であることが分かった。荻原君の鋭い観察眼に感動するとともに、歴史的な建造物の新しい価値観が共存している風景に不思議な感覚を覚えた。その後、大英博物館も訪問したものの、時間が足りずあまり見学できず、残念だった。



● UCL でのレクチャー

ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）にて私たちは、数々の論文を書かれた紅林秀和・岡本尚也両氏のレクチャーを聞いた。紅林さんからは、ケンブリッジ大学を卒業するまでの経緯や、研究内容について、そしてできる限り困難な道を選ぶ大切さについて教えていただいた。岡本さんからは、課題研究で大切なことについて、話の中で具体例を出しながら言葉の意味を理解する大切さや、課題を設定するうえで心掛けるべきことについて説明していただいた。確かに、今までの自分の課題研究の手法を省みると、岡本さんが問題視する「マジックワード」を多用していて、自分が調べている課題がどのような点で問題なのかをはっきりさせぬまま研究をしていたことに気づかされた。今後の課題研究に生かせることをたくさん学べた有意義なレクチャーであった。

● オックスフォード・ケンブリッジ両大学見学

3日目にはオックスフォード大学、4日目にはケンブリッジ大学を見学した。オックスフォード大学では、チェコ出身の卒業生の方の案内でクライスト・チャーチ・カレッジを中心に訪問した。このカレッジにはハリーポッターのモデルとなった大食堂がある。壁には様々な著名人の肖像画が並んでいて、その中には世界史の教科書にも載っているヘンリー8世やエリザベス1世のものもあり、11世紀末に設立されたといわれるオックスフォード大学の歴史の長さを感じた。街には大きな図書館があり、歴史的な街並みに息をのんだ。ケンブリッジ大学では2名の学生の案内で、大学内を散策した。学生から今までにどこを訪問したかを聞かれ、オックスフォードと聞くと、嫌そうな顔をした。オックスフォード大学の人々がケ



ケンブリッジ大学の
Mathematical Bridge。橋
は円の接線でできている

ンブリッジ大学のことを“the other place”というのと同様、ケンブリッジ大学の人も同じ言い回しをするそうだ。ともにイギリスを代表する大学である二大学の、切磋琢磨していく関係は良いと思った。

● 学生との交流会

オックスフォード大学やケンブリッジ大学では、そこに在籍する学生たちと話す機会をいただいた。オックスフォード大学では、本校OBで、文部科学省に入省しながら留学している方もいて、大変驚いた。また、高校になじめず、日本の高校を中退し、ウェールズの高校に転校したという方もいた。ある方はドイツに交換留学に行き、日本のテレビ局のワシントン支局でインターンを経験したのち、オックスフォード大学で学んでいた。日本など外国からは大学より大学院からのほうが入りやすいそうですが、様々な留学の形があることを知り、海外の大学への留学に興味を持った。さらに、日本語や日本文化に造詣が深い外国人留学生もいて、驚いた。例えば、オックスフォード大学に留学しているフランス出身の方は、アニメで日本語を学んだそうで、私たちも同じようなやり方で学んでみるのもいいのでは、と教えてくださった。また、オックスフォード大学で日本史を研究されている方になぜここで研究しているのか伺ったところ、ここでは資料などもたくさんあり、研究に適した環境があるとおっしゃっていた。同じようにケンブリッジ大学では、考古学を学んでいる方に、専門分野を聞いたら、縄文文化という驚きの答えが返ってきた。中でも土偶について研究されているとの話を聞き、びっくりしてしまった。オックスフォード・ケンブリッジ両大学は研究環境が充実していることが大きな魅力であることに気づかされた。土偶の研究をしている前述の彼女のように、研究内容が同じだから、教授に頼んで大学院生になったという人もいるそうだ。また、彼らによると、勉強を続ける秘訣は勉強に情熱を持ち、楽しむことが大切だということだそうだ。レクチャーをいただいた岡本さんと同じようなことを言っていたことに驚いたが、勉強を頑張るためには、これを楽しむことが一番のやり方なのだと思う。これからは勉強を楽しんでいきたい。



● セッション（クリス先生・ケンブリッジ大学生）

クリス先生からは、英語の質問の聞き方や、イギリス英語について、ユーモアを交えながら教えていただいた。また、ケンブリッジ大学生からはキング牧師の I have a dream. という有名な一節を含むスピーチを例に、スピーチの書き方と発表方法について大切にすべきことをそれぞれ6つ教えていただいた。説明がとても分かりやすかった。これらを心掛けながら、自分でスピーチを書き、大学生に添削していただき、みんなの前で発表した。新鮮な体験でしたが、注意すべき点を説明していただいていたので、満足できる発表ができた。また、3回ほどディベートをする機会があった。特に最後のディベートは「男女別学のほうが共学より良い」という論題で私たちが肯定側に、ケンブリッジ大学生5人が否定側にディベートをした。結果、私たちは負けてしまったが、私たちが協力して考え、またケンブリッジ大学生から鋭い反論をされる体験はとても貴重なものだった。

● 最後に

この研修に参加させてくれた両親、この研修をコーディネートしてくださった旅行会社の皆さんや、加藤先生や引率していただいた中村先生、そしてこの研修を最高のものにしてくれた26人の仲間たちに感謝したい。



先日、僕たちは移動も含め計八日間 Oxbridge 研修に行ってきました。思い返せば僕がこの研修に申し込んだのは去年の夏休み前で、そこから約八か月、長いようであつという間でした。正直僕は初め、この研修に参加したいとは思っておらず、親に勧められ半ば無理矢理に申し込まれた、という状況でした。そのため、倍率が高くたくさんの人が選考で落ちてしまったにもかかわらず、僕が選考を通してしまったことに少し申し訳なさを感じていました。先生方からも、選考落ちてしまった人たちの分まで頑張れ、弱気な姿を見せるのは許さないと言われて、



なんか大変なことになったぞと、大丈夫かと、最初の入りはそんな感じでした。そのため、最初の方の事前研修では、自分から話しかけたりとか、積極的に発言したりとか、一切していませんでした。しかし、やはりこの研修に本当に行きたいと考えていた人やこの研修にかかる莫大な費用を考えるとそうとも言ってられず、僕はこの研修を無駄にしないようにするために、三つの目標を立てました。一つ目は自分で現地、イギリスへ行って、異文化や世界感、実物に触れさまざまなことを肌で感じることに、二つ目は、人の前に出ることが苦手なので海外の人との会話を積極的にすることや、スピーチなどを通して克服すること、三つ目は、将来について一切興味がなく、高校卒業後の進路について未だ何一つ考えていない自分を変え、将来のことについて考え始めるきっかけを作ることです。僕はこの三つの目標を掲げてこの Oxbridge 研修に臨むことにしました。事前研修では、ALT のクリス先生や、担当の加藤先生に海外研修の厳しさや、日常会話、外国人に対するタブー、日本との違いなどたくさんのことを教えていただきました。どれも新鮮で知らないことばかりでした。事前研修がなかったら僕がイギリスで何をしでかしていたことか想像するのも恐ろしいです。

実際の研修では、まず行きのバスの中や、飛行機の中でこの研修に対する期待半面、非常に大きな不安を抱え、ものすごい緊張していたのを強く覚えています。僕がこの Oxbridge 研修を通して一番印象的だったのは、オックスフォード大学の大学生をまじえたグループでの会話です。オックスフォード大学に行く人なんて根っからのエリートたちなのだろうと、僕なんかとは住んでる世界が違って言うことも難しくわからないのだろうと僕は勝手に考えていましたが、そんなことはなく普通の日本の大学入試で失敗してしまった経験がある人とか、高校を中退した人とか人生の失敗を経験してる人もいてすごいわかりやすい話をしてくれました。その中で聞いたオックスフォード大学の大学生の将来のビジョンだったり、夢だったり、そのためにオックスフォード大学でできることだつたりの話に猛烈な魅力を感じました。オックスフォード大学の大学生の中には前高出身の人もいて、話が盛り上がりたりもしました。オックスフォード大学は、授業数が少なく、自分のやりたいことを徹底的にできる、やりたくない教科はやらなくていいというところにごく魅力を感じ僕もそういうところへ行って自分の好きな数学もしくは歴史に没頭したいと思いました。僕はこのオックスフォード大学生との話が終わった後、言いようのないやる気と今まで楽なほうへと逃げてしまっていたことへの後悔を感じました。そこで、もっ

と勉強して英語話せるようになってできることなら留学をしてみたいなと強くではなかったもののかずかにそう思いました。僕はそれまで、ゲームが大好きで休みの日には一日十時間もしてしまっていました。しかしそれではだめだと、今のままではこのオックスフォード大学生には追いつくことはできないと感じ気持ちがかわらないうちに友達にスマホのスクリーンタイムの設定をしてもらいゲームを一日十五分までに減らすことを決めました。ほかの人から見たらそんなの当然だと思われるかもしれませんが、一日の大半を占めていたゲームをなくすことで、勉強時間を確保しやすくなるため自分的には大きな変化だったと思います。



Oxbridge 研修では他にも、スペインの小・中学生くらいの子たちと交流をしたり、大英博物館へ行って歴史的な産物を見たり、ケンブリッジ大学のサイエンスフェスティバルにいたり、ケンブリッジ大学の大学生や Oxbridge 研修へ行ったみんなの前でスピーチをしたり本当に様々な体験をさせていただきました。どれもこれも貴重で忘れることができないものでした。ケンブリッジ大学の大学生とのディベートでは、自分たちで企画をしそれをケンブリッジ大学の大学生とできたことに感動しました。ケンブリッジ大学の皆さんの意見には相手側だったにもかかわらず共感し感心させられました。このディベートで僕は自分の意見を発表することができました。テンパってしまったし、英語もタジタジだったけど、人の前に出て発表したり発言したりするのは大の

苦手だったため、我ながら成長したなと思いました。

イギリスから日本に帰ってきた今、行く前に立てた三つの目標と自分の研修内での様子を照らし合わせてみると、今回の研修が自分にとって成功であったことがわかります。一つ目の目標に関しては、大英博物館で今まで教科書などで見てたものの実物を見たり、現地の人との会話を通して異文化について知ることもできました。二つ目に関しては、上記で述べた通りみんなの前で意見を言ったりスピーチをしたりできたし、三つ目に関しては、かすかながら留学という目標ができました。このように素晴らしい研修にできたことに満足する反面、初めからもっとしっかりやっておけばもっとたくさんのことを学べたかもしれないという後悔が少し残ってしまいました。しかしこの後悔を取り消すことはできないため次このようなことがないように、次に生かせるようにできたらいいなと思います

最後になりますが、僕は今このような素晴らしい研修に参加できたことにもものすごく感謝しています。この研修を作ってくれ、かつ研修と一緒にいき僕らの背中を押してくれた遠井さん、主担当として様々な大切なことを教え僕らを支えてくれた加藤先生、引率者として僕らを率い成功に導いてくれた中村先生、現地のセッションで英語の授業では学べないようなイギリス独自の発音や英会話について楽しく教えてくれたクリス、研修中ずっと付き添ってくれて飯のときにたくさん話してくれたオリイ、多少強引ではあったが僕にこの研修に参加することを勧め金銭面や様々な部分で助けてくれた両親、その他にもこの研修を実施するにあたってかかわってくださったすべての方々に感謝の気持ちを述べたいです。本当にありがとうございました。僕は今回学んだこと感じたことを忘れず、もっともっと英語を学び日本語を話すかのように英語を話せるようになりたいです。そしてこの住みよい日本に安住することなく、世界に出てもっとビッグな人間になりたいです。本当に行けてよかったそう思える研修でした。

● 研修に参加した理由

私は、人に憧れやすい性格だ。努力して何か特別なことを成し遂げた、そんな人に憧れる。ただ憧れてそれで終わりなのが、私の悪いところなのだが。それはさておき、中学3年生の春頃、私は前橋の某英語塾に通い始めた。そこで大学合格者の合格体験記とやらを貰ったのだが、それを読んだ途端に私の例の性格が、面識もないある1人の前高の先輩に強く反応したのだ。この人のような人間になりたい。そう思ったから、その先輩が行った Oxbridge 研修へ申し込んだ。そんな単純な理由だ。

● 研修の注意点

- ・研修は、予定通りにはいかないことが結構ある。突然外国人との交流ができるようになる時もあるので、ネタ等日本で十分に準備するべきだと思う。
- ・外国人としゃべる機会があれば、積極的に話しかけるべきだと思う。なるべく初日から話した方が自分の英語に対する頭や耳の順応が早いはずだ。(私個人の意見)
- ・悪いことは言わないから早く布団に入りなさい。私は最終日に大胆に寝坊しました。本当にごめんなさい。他の研修生への迷惑もあるし、何と言ってもそれまでの充実した研修が台無しになりかねないので、寝坊は絶対にやめましょう。

● 学んだこと

1. 勉強する意味

現地で、日本の方・外国の方を問わず、頭の良い人達から話を聞くと、必ず印象に残るのがこの話題だろう。皆さんも一度は、「なんで俺勉強しなきゃなんだろう？」と思うときがあるはずだ。実際私も、明確な目的意識がないままで生活してきた。そんな中、岡本さんの講義や Cambridge 生の皆さんとのセッションで、「話題について行けない」という状況に置かれたとき、なんとなく分かった気がした。私は、あまりにも知らないことが多すぎるのだ。それは世界はおろか、日本国内のことについても同様である。現地にいる彼等・彼女等のような、“もう1つ上の人間”になるには、既知情報・既習情報をいかに増やしていき、自分なりに咀嚼し、理解するかが大切なのだと思う。



2. 自分磨き

これも研修全体を通して感じたことだ。私達研修生は、Oxford 生と Cambridge 生の両方と話し、質問をする機会があった。そこで、明らかに彼等・彼女等が違うと思えたところは、“人間性”だ。現地の学生の皆さんは、こちらが外国人だったからかもしれないが、つねに寛容に対応してくださった。だから自然に「もう一度イギリスに行きたい！」と思えた。また、あの方々にとって勉強は自分をかたちづくるための道具であり、中にはスポーツにも熱心な、日本で言う文武両道の方もいた。また憧れる訳ではないが、あの方々のような寛容で気取らない人になりたいものだ。

3. 決心する

私が特に苦戦したのが、勇気を出して話しかけることだ。日本人特有なのか、はたまた私個人の欠点なのか分からないが、「話してみようかな…」と、相手に話しかけようとした瞬間謎のドキドキする感じが体の中から沸々と湧き上がってくる。それは自分の語学力や“教養”に自信がないなど、まあ理由は色々あるのだと思うが、それを断ち切るのに長い時間がかかった。私が思うに、この研修では、そのような内心の葛藤を経験することが大事なのではないか。長くても短くても、その葛藤から、“決心”が生まれ、人間的に成長できた感があるのだろう。そんな機会を作ってくれる所が、この研修の良いところなのでは、と繰り返し思う。

●まとめ

今回の研修は、決して、将来こんなことをしようとか、英語の勉強がどうのとか、そういうことを学ぶ研修ではなかった。私は自分自身でも、なぜこの研修に参加できたのか分かっていないのだが、今は、このような“人生における一つの分岐点”とも思える Oxbridge 研修に参加できて、とても清々しい気持ちでいる。今回の研修で、多くの人に憧れた。こんな機会は日本にそうそうない。不真面目だった今までの自分は捨てて、地道にコツコツと人間的魅力のある新しい自分をかたちづかっていきたい。

最後に、ISA の遠井さん、中村先生、現地イギリスの皆さん、研修生の仲間、そして遠くから見守ってくれていた家族・祖父母・親戚各位に、感謝。



Oxbridge 研修について

佐々木 瞭

●はじめに

私が Oxbridge 研修について知ったのは前高入学以前である。「志望理由書なに書こうかな」と思って前高のパンフレットを眺めていたら「Oxbridge」とかいういかにも意識が高そうな単語を見つけたのだ。もちろん志望理由書でも前期の面接でも「Oxbridge 研修行きます。」と熱く語ってしまったので、もう行くしかない。

●研修の概要

振り返ってみると Oxbridge 研修は私にとって刺激に満ち溢れていた。ここでは特に印象の強かったことについて記す。

1, スペインの中学生との接触

研修初日、成田から 13 時間のフライトを終え、疲れ切っていた我々の前に突如として現れたのは我々と同じ寮を利用していたスペインの中学生たちであった。日本の中学生とはわけが違う。彼らの話す英語が聞き取れないのだ。なんとか自己紹介をしても相手の名前すら聞き取れなかった。このとき私の英語に対する自信は粉々に砕かれた。が、そこに救いの手が。あちら側が体を動かす遊びを提案してくれたのだ。やはり言語を用いなくともコミュニケーションをとれるのは素晴らしい。その日はそれに甘えていたが自分の英語力を高めなければと決心した。



2, クリス先生(前高の ALT の方ではない)

Oxbridge 研修には毎年指導に当たってくださるクリス(Chris)先生という方がいる。おもに寮での夜のレッスンを行ってくれた。日本の授業では習わないコミュニケーションにおけるテクニックなどを習った。この人は本当に凄い。実戦形式の学習など、生徒が楽しく、かつよりよく学習できる授業で、受けていてどんどん引き込まれていった。このレッスンで学んだテクニックは一生役に立つものだった。

3, 紅林さんと岡本さん

2 日目は UCL(ロンドン大学)で紅林さんと岡本さんの話を聞いた。

紅林さんの話からは、人生は選択の連続だから、選択の度に難しい方を選び続けることで、その選択が将来の成功への重要なピースになるかもしれない。また、今やりたいことがなくても挑戦し続けることでそれが見つかるかもしれないこと。自分の力を伸ばすためには競争と協調のバランスを保ち、自分が何をしたいか、何ができるのかを常に考え続けることが重要であるということも学んだ。

岡本さんの話からは、教科書に書いてあることをただ覚えるのではなく、「なぜそうなるのか」と疑問に思って原理まで理解することが大切であること。自分のやりたいことが見つからないのは視野が狭いからで、自分の知見を広げるためには新聞など、嫌でもたくさんの情報が目に入ってくるマスメディアを利用するのが良いこと(インターネットのニュースは使用者の興味のあるものしか表示されないため)などを学んだ。

4, オックスフォード生との交流

- 4,5 人につき 1 人のオックスフォード生が来て、質問をする機会があった。その中には元前高生の人もいて、皆が「自分のやりたいこと、好きなこと」を大学で学んでいること、やりたいことが見つからないのならいろいろなことに挑戦するのが良いということをお話していた。この話は紅林さんの話と同じだ。やはり世界で活躍している人は皆、同じように夢を追って生きているのだなと思い、同時に自分は未だにやりたいことが見つからないことに不安を感じた。

5, ケンブリッジ生とのセッション

- 5,6 日目はケンブリッジ生が我々の宿泊している寮にきて、彼らの考えた英語のトレーニングプログラムを行った。スピーチをするときの間の置き方や抑揚などのテクニックを学んだり、リーダーであるということの本質について考えたり、ケンブリッジ生との討論をしたりした。特に討論では、男女別学の学校と共学の学校はどちらがいいのかについて討論し、とても白熱したものとなった。このトレーニングプログラムの間が最も多くの時間英語を話し、最も大きく語学力が成長したと思う。しかし、大学生の話す英語が聞き取れないことも多々あった。



6, イギリスの飯について

- イギリスから帰ってきて最も多くの人に聞かれたのがこれである。もっと生き様研修的なことを書けよとも思うが、自分自身書きたかったりするので少しだけ触れておく。
- 結論から言うと日本の飯の方が断然うまい。イギリスのは甘すぎたり、しょっぱすぎたりとにかく味付けが日本人の舌に合っていない。我々が止まった施設は二つだが、うち一つは日本の組織が絡んでおり、日本人のシェフがいたのでとても美味しかったが、それ以外はあまり期待しない方がよい。

●全体を通して

この Oxbridge 研修を通して感じたことだが、まず第一に英語力、特にリスニング力と語彙力をつけなければと感じた。話が聞き取れないことがあまりにも多かったからである。あちら側が一生懸命に用意してきて話してくれていることを受け止めきれないというのは凄くもったいないことだ。

そして第二に紅林さんに言われたように、人生の選択は難しい方を選び、将来の成功のためのピースをためて生きていくということの重要性を感じた。この研修の中で最も心に残る話だったし、何より今自分のやりたいことが決まっていな私にとっては、今やるべき最も重要なことだと思ったからだ。

●まとめ

今回の研修は、毎日が驚きの連続で、今まで生きてきた中で最も充実した 8 日間であった。将来のこと、勉強のこと、社会のことなど、多くのことを考えさせられ、世界トップレベルの学生たちから考えもしなかったような考え方を取り込むことができた。私はこの研修で大きく変わることができたと思う。ここで学んだことを学校に、自分に、活かしていきたいと思う。

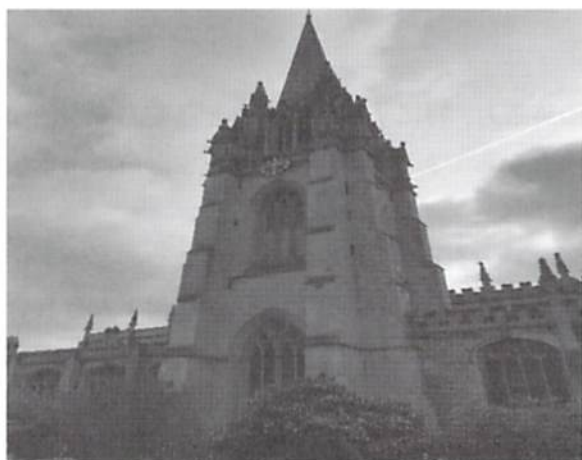
最後に、この Oxbridge 研修に関わって支えてくれた ISA のみなさん、先生方、現地の皆さん、そしてこの研修に行かせてくれた家族。本当にありがとうございました。

●Oxbridge 研修に参加するまで

はじめ、Oxbridge 研修について聞いたとき、「英語はできないし、大変そうだ」とぼんやり思っていた。正直、あまり乗り気ではなく、親から強く勧められたことで研修に参加しようということになった。それなりのことを書いたつもりの理由書には、淡い期待と強すぎるほどの不安が混ざっていたような気がする。紆余曲折があつて、もう頑張るしかないと心を決めたのは前日の夜くらいだった。

●研修中に思ったこと 前編 ～英国を実感～

期待 2 割、不安 8 割の心と荷物とともにイギリスへ降り立つと、そこには英語しかなかった。ちゃんと英語を勉強するべきだったと早くも後悔した。寮へ行くとスペイン人の学生のグループ（中学生くらい）もいて、交流をする機会があつた。英語も上手で、活発的で、すごいな、と感心してしまった。自分がそうならなければいけないのに。2 日目、ロンドンの市内観光で行った大英博物館は、歴史の教科書の中の世界なのではないかと思うくらい、いろいろなものがあつた。これが見ただけでも十分なのかも、なんて思った。ここで、現地のアシスタントの人（研修中ずっと行動を共にした）と初めてコミュニケーションをとった。拙い英語で、文法もぐちゃぐちゃだったが、なんだか無性に楽しかった。その後、岡本さん、紅林さんの講演やオックスフォードの学生との交流で、世界で活躍する人たちの姿を見ることができた。みんな、自分の将来の目標があり、その選択に迷いが見えなかった。目が輝きすぎてまぶしかった。夢や目標が与える力というものなのだろうか。「やばい」とか「すごい」とか、そういう感想しか考えられない自分が憎くなるくらい、彼らの力、希望は強かった。

**●研修中に思ったこと 後編 ～英語のシャワー～**

4 日目からはケンブリッジへ移動した。ここではとにかく英語を聞く機会、話す機会が多かった。英語が苦手なために、少し苦痛に感じることもあつたが、時間が経つにつれて、ちょっとだけわかったような、わかっていないような感じになった。最終日にはこれまで学んだことを使ったスピーチや自分たちで発案して、ケンブリッジ生と前高生でディベートをした。ケンブリッジ生の意見は、とても鋭く、勝負



になったかどうかすら怪しいが、いつか自分も英語でこれくらい言えるようになったらカッコいいのにな、と憧れを感じた。

●研修を振り返って

研修を終えた今、自分の中ではもっと積極的な姿勢をとれば、もっといい研修になったのではないかと、思っている。後悔してもやり直しなどできないことだが、その後悔を今後につなげなければならないわけで、自分の生き様、というものを考え直さないといけない

と思った。外国の人と英語で話すことができたし、研修の後半では後半では自分から話しかけることもできた。その一方で、みんなの前で何かをする、ということからは、逃げてしまった。いいことは続け、悪いことは改善する、などというのは当然のようなことだ。自分は後悔を手にしたが、失敗も、成功の糧も手にすることができなかった。何かにチャレンジするとき、手に入れられるものと、失うものを天秤にかける、そして結局チャレンジしない。最初、Oxbridge 研修もそのようになるどころだった。しかし、研修に参加したことで、手に入れ難いような経験をすることができた。そして、手にした後悔をどうするか、この研修で体験したことすべてに意味を作り始めることができるか。それが今自分に課された課題だ。将来のことについて適当な考えでいいのだろうか、消極的な姿勢に価値を見つけ続けるのか、生き様らしいものは見つけられたのか、などなど、目を覆いたくなるような耳の痛い問いだが、この研修を通して、自分自身に強く問いかけられた。回答期限はないし、自分にとっては後回しにしたい問いだが、回答が早いだけ、何かあるような気がする。これもチャレンジの一つだ。ばからしい嘘を作り続けて、チャレンジしない理由に仕立てるのは、そろそろ終わりにしたら？なんて考えは、甘くて割れものの自分には鋭すぎる。しかし、今だけは逃げない、みたいな決意をしてみたい。けもの道を探してみたい。

それなりのことが書けた、と思ったら、研修の前の未熟な理由書と一緒にになってしまう。研修で本当に何かを得たのなら、ちゃんとチャレンジしてみろ、と自分にくぎを刺しておく。よくわからなくなってしまったが、チャレンジ精神をしっかりと持てるようにします、と宣言しておく。

●最後に

この Oxbridge 研修には、多くの人が関わってくださっている。自分は多くの人の支えがあって、研修に行くことができた、ということに感謝するとともに、期待も背負っているのかもしれない、と思った。研修によってどれだけのことを手に入れられるか、どれだけ成長できるかは、これからの自分次第だ。そういった思いを忘れずに、まだまだ Oxbridge 研修は続いていく、と考えながら、自分の生き様をよりいいものにできるように努力していきたい。

私は人生の中で一番と言ってよいほど刺激的で充実した一週間をイギリスで過ごすことができたと思う。というのも、この研修では挑戦する機会というのが非常に多くあり、挑戦するたびに自分の変化というものを感ずることができたからだ。イギリスでの一週間がどのように刺激的でどのように充実していたのか、またどんな挑戦をしてどのように自分が変わったのかを詳しく記したいと思う。これを読んでこの研修に興味を持ち、参加を希望してくれたらとても嬉しい。

私達が三泊したパークシャーカレッジの寮には同じように研修でイギリスに来ていたスペイン人の中学生たちが先に滞在していた。そのため、初日のアクティビティは彼らと一緒にいった。彼らの学校ではすべての授業が英語で行われているため彼らの英語はとても流暢だった。その上、彼らはとても活発ではつらつとしていた。彼らの熱量に少し圧倒されていた私はなかなか話しかけることができなかったが、この機会を逃したくないと思った私は腹をくくって話しかけてみた。互いの自己紹介をし終え、スペインの流行などを聞こうと思ったとき、彼女はどこかへ行ってしまった。自分に全く興味を持ってくれなかったようで少し悲しくなったが、こんなことでへこんでいたらもったいないと思い再び違う子に話しかけてみた。穏やかそうな男の子で話しかけやすかった。同じように自己紹介をし、今度は日本の流行について話そうとしたが、話し始めるがいなや彼はどこかへ行ってしまった。もともとメンタルが弱いのもあって二度目となるとさすがに傷ついた。そのまま初日のアクティビティが終わってしまった。もともと英語が好きで得意教科だった私は、今まで学んできたことがほとんど活かせなかったことに対して自分を責めた。しかし、責めるだけで終わらせるのではなく、どうしたら相手に興味をもたせ会話を長続きさせられるのかを必死に考え、話のネタなどをしおりに書き込み次の日のアクティビティ臨んだ。前日のようになるのが怖く少し消極的になっていたが、事前に考えたネタがあると思うと少し気が楽になった。前日の反省を踏まえて話をしてみると以前より少し話が盛り上がり、とても嬉しかった。地味な努力でも、熱心に努力すれば報われるのだと身をもって実感できた良い機会だった。

ロンドン観光の後、岡本先生と紅林先生に講義をしていただいた。私は二人の講義が始まってすぐに、この人たちは普通の人とは何かが違うと思った。少なくとも私に見える世界とは全くと言ってよいほど違う世界が二人には見えていると感じた。講習を受けた人は皆それぞれ違うことを感じ取り、学んだと思う。私は特に、岡本先生の話に刺激を受けた。岡本先生は課題研究について、課題研究では自分で興味のある課題を見つけ、その課題が課題になる理由を知らなければいけないと言っていた。そのため、学校から SDGs をやらされてはいけず、当事者意識をもって取り組まなければいけないと言っていた。実際に、学校で行った課題研究では興味のある課題について研究したものの、ほとんど当事者意識というものが無い状態で取り組んでいたのが、岡本先生の話聞いた上で自分の課題研究を振り返るととても情けなくなった。また課題研究とは別に、マジックワードについての話とても刺激的であった。以前からそれらがどういうものなのかは知っていたが、講習を通して新たにそれらが発生する原因とそれらの対策を知ることができたので良かった。前高に入ってから、勉強ができるというのと頭が良いというのは別のものだと思い始めたが、私は岡本先生と紅林先生は本当に頭の良い人たちなのだと思う。語彙

が拙く頭が良いとしか表現できないが、彼らは勉強に対する考えが私とは異なり私が見ているところよりもはるかに先を見ていて、私には彼らが輝いて見えた。私も彼らのような人間になりたいと強く思った。

Chris 先生はパークシャーに滞在している間、私たちに同行してくれて Oxford のガイドや、夜には授業もしてくれた。ロンドン観光の際、Chris 先生が暇そうにしているところを何度も見かけたが、周囲の目が気になり話しかけることができなかった。私はその晩、まったく話しかけられなかったことをとても後悔した。その悔しさをばねにし、翌日の Oxford 観光の時には積極的に話しかけてみた。会話があまり続かないこともあったが、気になる建物があればすぐに質問をしたりした。すると Chris 先生が自分の名前を呼んでくれて、Oxford の中で一番小さいカレッジを自分に紹介してくれた。積極的に話しかけたからこそ得られた知識であったため本当にうれしかった。夜の授業もとても楽しく眠気は微塵も感じなかった。



Oxford 生、Cambridge 生との交流は研修の中で自分が特に楽しみにしていたことの一つだった。勉強方法や世界の大学で学ぶ人たちが EU 離脱についてどんな考えを持っているのかなど聞きたいことがたくさんあった。勉強方法については両大学の生徒ともに予習復習をしっかりとやることだと言っていた。これは普段から先生が口を酸っぱくして言っていることだが、Oxford 生と Cambridge 生に勉強法を聞いた時にそう答えられるので相当大事なことなのだと感じた。私は彼らに様々な質問をしたことで彼らのある共通点を見出すことができた。それは彼らは皆、好きなことを追いかけた結果 Oxford、Cambridge に入学したということだ。けっして Oxford 生、Cambridge 生という名が欲しくて入ったわけではなかった。ある Oxford 生は何事も好きじゃなきゃ続けられない、勉強も好きになれないと続けられないと言っていた。彼らは勉強が好きになり、その好きを突き詰めた結果そこにいるのだとわかった。好きこそものの上手なれという言葉は勉学の面でも通用するのだと感じた。Cambridge 生の授業は挑戦する場面が多くあり、とても充実したものだった。Cambridge 生といっしょに食事ができたのもとても貴重で素敵な体験だった。



私はこの研修がとても有意義なものであったと胸を張って言える。しかし、周囲のサポートがあったからこそ有意義になったわけで、けっして自分ひとりの力ではない。引率してくれた中村先生や遠井さん、加藤先生や現地でお世話になった人たちには感謝してもしきれない。これからは行動で周囲の人へ恩返しをし、学んだことを存分に活かしていきたい。そして自分の好きなことを突き詰めたいと思う。

変化

高橋 香貴

●参加動機

私がこの研修に参加したいと思った動機は、単純に面白そうだったからだ。最初はそんな興味本位だった。しかし、前高での生活を過ごすにつれ、自分の甘さや弱さを克服するきっかけが欲しいと強く思うようになった。この「生き様研修」に参加し、世界を知り、物事を深く考えることで何か得られるものがあるのではないかと思い、参加希望をすることを決意した。

●研修内容と学んだこと

<事前研修>

研修を成功させるためには事前の準備も欠かせない。全5回の事前研修を受ける中で、私は自分自身について理解しておらず、何の武器も持っていないことを思い知らされた。少し当日を迎えるのが怖くなったが、改めて考えるとそれも大きな気付きで研修の醍醐味なのかもしれない。

<1日目>

寮のあるパークシャーカレッジにはスペインから来た中学生たちも滞在していて、急遽交流をすることになった。交流の際、私は活気あふれる彼らに圧倒されてしまい、挨拶程度しかすることができなかった。話しかけに行こうと思っても、“Excuse me.”や“Hello.”の一言が言えなかった自分の消極性を痛感した。このままではいけないと思い、翌日は積極的にいこうと決意を固めた。

<2日目>

この日の午前中はロンドン市内見学だった。ロンドンの統一感のある街並みやバッキンガム宮殿などの有名な建物を味わうことができた。中でも、大英博物館の展示物にはイギリスだけでなく世界からの品物が至る所にあり、わくわくした気持ちが抑えられなかった。展示物についての説明が世界史で学んだことと繋がったときは、世界史を勉強してよかったと歴史を学ぶ面白さを感じることができた。

午後は、UCLに移動し紅林さん、岡本さんからのレクチャーを受けた。この話は自分にとってとても刺激的であった。成功を勝ち取るためには自分にとってリスクのある苦しい方を選ぶ必要があるということ。物事について興味関心を持ち、その知識を十分に蓄えることで、表面的だけでなく真理や原理まで追求することができる。これらが自分にとって必要な力であること。一見大したことないと思う人もいるかもしれないが、実際にはこれらのことをできる人は多くはないと思う。イギリスという地でお二方の熱い話を聞くことができ、とても貴重な時間であった。



夜、幸いにも夕食の時間にスペインからの中学生との交流することができた。日本のことや相手国のことについて会話を楽しむことができた。反省を生かすことができ、少しほっとした。その後に受けたクリス先生のレクチャーでは、英語を話す練習をたくさんしていただいた。どの単語を強調して伝えるべきか、どんな声の調子で言うべきかなど考えたこともなかった。相手を意識した英語は、日本の授業ではあまりなく、とても新鮮で英語の面白さに気付くことができた。

<3日目>

この日はオックスフォードの学生とのセッションがあった。やはり、それぞれの学生が自分の興味関心をもとに1つのことをとても熱心に学んでいることが話しぶりから分かった。また、将来についての考えがはっきりとしていて、凄いなと思った。オックスフォードの日本人学生の話も聞く中で、外国で学ぶのもアリだなと自分の将来の視野が広がった気がする。いずれにしても今自分にできる事は、その可能性を広げ、選択肢を多く持つために学力を高めることと、何か打ち込めるものや熱中できるものを見つけることだと思った。

<4日目>

この日にケンブリッジに移動し、学生たちによるキャンパスツアーとサイエンスフェスティバルポイントとなるところで止まって説明をしてくれたのだが、彼らの英語があまりに流暢で、知らない単語が次々に出てきたので正直内容はほとんど分からなかった。その話を理解できるほどの英語力があればたとえ少し残念であった。

<5日目>

ケンブリッジの学生たちとの本格的な交流が始まった。特に、ホットな話題である「EU 離脱」についてどう思うか話すことができてよかった。実際私が質問したすべての学生は反対の立場であった。ヨーロッパ間での繋がりが弱まる不安がある人、EU による恩恵が大きかったという人、理由は様々でとても面白かった。この時点で見知らぬ学生と話すことに抵抗を感じなくなっている自分に少し驚いた。

<6日目>

現地での研修の最終日。理想の「リーダー像」について意見を交換した。リーダーに必要な能力を自ら考える良い機会であった。午後はこの研修の成果発表として、一人一人スピーチをした。自分の考えをこの研修で学んだより良い発表の仕方をもとに英語で伝えた。まさにこの研修の集大成だった。

そして最後は私たち発案の「ディベイト」だった。私たちも理由をしっかり考えて主張したのだが、それ以上にケンブリッジ生の多面的な考えや考えの深さ、話しぶりは圧巻であった。この人たち凄いなと素直に負けを認めるとともに、2、3年後この人たちのようになっていたいと思った。短い時間であったが、夢のような時間を過ごすことができた。



●研修を終えて

この Oxbridge 研修は私にとってかけがえのない、貴重な経験となった。自分はどんな人間か、自分に必要な能力は何か、自分は帰国後何をすべきかなど、自分のことを深く考えることができた。他にも、深く学び本質を追求する面白さや重要性、相手にうまく伝える方法やその難しさなど、学んだことは数えきれないほどだ。これらの糧となるものを、自分がどう生かしていくかが大切だと思っている。

●最後に

この研修にご尽力いただいた、ISA の遠井さん、引率の中村先生、ご指導いただいた加藤先生をはじめとする自校の先生方、そして私の両親に感謝したい。ありがとうございました。

Oxbridge 研修

高橋 泰平

とにかくこの研修は僕にとってとても大きなものだった。

帰国時の飛行機内で研修への参加を申し込んだときの自分の申込書を読むことになったわけだが、そこには「先輩が口をそろえて言う、(世界が変わる)というのを実感したい。」と書かれていた。実際、まさに世界が変わった。具体的には世界に対する考え方と勉強に対する意識だ。

僕が英語が苦手というのものもあるかもしれないが、特に大きかったのは紅林さんと岡本さんによるレクチャーと、Oxford 大学生との交流だった。ともに日本語で会話することができた。

前者では、特に岡本さんが印象的で、抽象化して具体的な実態を全然把握できていない現代人のことや、世界を知る、今を知ることの大切さ、「なんでなんで」を繰り返して物事に対する自分の意見を洗練することを教えてくれた。

例えば少子高齢化。なんで少子高齢化が問題なのか。人手不足に襲われるから？じゃあなんで人手不足が問題なのか？AI を使えばいいじゃないか。と彼は言った。僕らはそれに反論することができなかった。このように、僕たちが知っているようで何も知らないということを教えてくれた。

また、両者ともに海外へ渡った同じ日本人としての経験がとても参考になった。

後者でも、全員日本語が少しはわかるようで、難しいところは日本語で説明してくれた。留学生の中に日本人も二人いてそのうち一人は前高 OB だった。ここでは前高生 4、5 人に対して Oxford 生一人で質問形式だった。主に勉強に対する質問で、頭のいい人の勉強法を聞いて新しく学んだり自分のやり方に自信が持てたりした。

そんな中僕が気付いたことは、「頭がいい人は勉強で息抜きをする」ということだ。例えば、英語訳の映画を見て実際に日常会話で使用されるフレーズを学ぶこと、英語の本を読むこと、古典の物語を本や漫画などを読んで知っておくことなど。

と、こんなことも学んだわけだが、何より一番感じたのは、日本語に甘えている自分。

All English の場面では理解できることは半分以下で 4 割くらいだ。その上わからないのは自分だけってときもあった。大学生への質問内容を英語にして一方的に話すことはできても、相手が一生懸命それに対応してくれているのに何を言っているのかわからない。申し訳ないもったいない。実際、自分が上の二つのことが印象に残っているのは日本語を聞くことが可能で理解しやすかったからだ。

確かに研修内では、内容が大事な時と、英語を使って話すことそれ自体にウエイトがあるときがあったように感じたから、英語が苦手だったためにすべてが台無しというわけではなかったし、つたないながらも英語を使えたこと、外国人と会話できたことに楽しさを発見することはできたものの、英語ができたならもっと得るものがあつたらうし会話も広がったはずだ。そんなこともあつて自分の英語の弱さを実感し、モチベーションを得た研修でもあった。

次に、研修を通して僕自身がどのように変わったかについてだ。

まず、英語の能力。これは結果から言うと変化なし。一週間だけで変わるはずがないのでわかってはいたが、でも、英語を聞き取ることに関しては少し耳が慣れた程度ではあるが、上達したと感じている。また、研修の期間内で目に見えて上達することはなかったが確実にモチベーションを上げることはできたのでこれからの成長につながるいい機会であったことは間違いない。

次に、この研修の代名詞でもある、生き様。研修に行く前は何のことだかよくわからなかったが、

Cambridge 生や Oxford 生の勉強や世界の動向、将来に対する考えに触れたり、彼らの夢に対する強い意志を感じたりすることでわかった。僕にはまさにこれが足りていないと感じた。特に将来の自分のビジョン。彼らとのセッションで自分たちの短期的目標と長期的目標を考えたのだが、僕は全くと言っていいほど将来を見据えられていないので、みんなが医者って言っているのに流されて、短期的目標は医学部に入学すること、長期的目標は医者になることといった。薄っぺらさがにじみ出ていた。あまりに薄くて恥ずかしかったので帰国してからはずっと考えている。

最後に、自主性。僕は今の今まで自主性という言葉が大嫌いだった。まさに抽象的で使い勝手がいいから使っている感が否めなくて、しかもみんな口をそろえて言うくせに実現できている奴がほとんどいないものだから、自主性と言ったら自主性がなくなるとさえ思っていた。そしてこの研修でも先生は自主性自主性といった。だから僕は正直聞きた

びにうんざりしていたのだが、実際現地に行ってみるとほんとうに自主性が必要なのだ。外国の人と何か話したいと思っても、現地の人たちから話しかけてきてくれるはずがない。そこには自分から行動する姿勢が必要だし、この研修のプログラム以上のことを学ぼうとすれば、そこにも自分で考えて行動する必要が出てくる。住み慣れた日本という国を離れて学校や家族の保護の下から抜け出す経験であったから、なおさら自主性が必要となった。僕は研修の最初のほうは相手が意味の分からない英語を話してきた

らどうしようとか、うまく言葉にできなくて詰まっ
てしまったらどうしようとかいろいろ考えて弱気
になっていたが三日目の Oxford 生とのセッション
の時に意外と意思疎通ができるということに気が
付いてそのあとは自分からどんどん行くこと
ができた。最終的には写真を現地の学生と撮ったり
一緒に食事したりすることができた。



Oxbridge 研修を終えて

多賀谷 大輝

● はじめに

私が、この Oxbridge 研修に参加したいと思った理由は世界の大学ランキング、1位、2位を争うオックスフォード、ケンブリッジの学生と実際に話しこれから世界のリーダーとなる彼らはどのように考えているのか知りたかったからだ。今回の研修では計 27 名が参加したがそれぞれ感じたことに異なる部分があると思う。この報告書に目を通し、この研修で私たちが何を学んだのか感じてほしい。また研修に興味を持ってほしいと思う。

● 研修の内容

この研修では、朝から夜までたくさんのプログラムが詰め込まれていたが、私がこの研修を通して特に印象に残ったことを書こうと思う。

①岡本尚也氏による講演

岡本さんは、慶応大学を卒業後 Cambridge 大学では物理学、Oxford 大学では日本学を学び、現在は故郷の鹿児島を中心に活動している方である。

講演をされた時間は短く、流れるような展開だったが、私はこの岡本さんの話が強く印象に残った。それは私がこれまで生きてきた 16 年間では教えてもらえなかったような内容だったからである。例えば、「今まで学校でしてきたような理科の実験は現象を知っただけであり、そのことに汎用性はなく根本にある原理を追求しなければならない」や、『地域の活性化』や『主体的』などの聞こえが良く誰もがそれなりに納得し、否定できない言葉（マジックワード）に注意」といったことだ。特にマジックワードについては、意識してみると私自身多用してしまっていると感じ、とても興味深い話だったと思う。これを防ぐために、言葉の本質を理解することや、言葉の言い換え表現を考えること、課題を細分化して根底にあることを発見することを意識しようと思う。



②Oxford 大学の学生との交流



研修 3 日目の午前中はハリーポッターの撮影にも使われた Oxford 大学の様々なカレッジを見学した。そして午後には、日本人 3 名（その 1 人は前高出身）を含む 7 名の学生とのこちらからの質疑を中心とした交流会が行われた。流暢に日本語を話すフランス出身の男性に圧倒されたり、学生時代に英語をどのように勉強したのかを日本人に尋ねたりして、彼らの話からとても刺激を受けた。また、彼らは全員将来の明確なビジョンを持っており、それを常に抱き続ける姿はカッコいいと思った。しかし、上手く英語を聞き取れないこともあり、彼らが一生懸命話してくれているのに申し訳ないという気持ちとレベルの高い話を聞くことのできない自分の英語力の欠如がとても悔しかった。

③Cambridge 大学の学生によるエンパワーメント・プログラム



研修5日目と6日目は Cambridge 大学の学生 5、6 名によるプログラムが行われた。研修も終盤で、リスニングにも少しは慣れてきたところではあったが、私はここで大きく 2 つ、苦い経験した。

まず 1 つ。僕たちの班を担当した学生から、セッションの中で少し時間が余ったので、全体で計画されていたことに加えて、安倍首相（日本の政治）のこと、Brexit のことに対してどう思うかということ質問された。しかし、私は英語力がないというよりも自分がそのことについて知識が十分でなかったため、上手く答えることができなかった。日本人なのに日本のことを全然知らず、タイムリーな話題も十分理解できていないと痛感した。

もう 1 つが良いリーダーとはどんな人かという議論についてだ。私はここで、みんなに尊敬され、信じられている人がふさわしいという趣旨の発表をした。だが、学生からはなぜそれが大切なのかということ述べるべきだという、鋭い指摘を受けてしまった。よく考えると、私が発表した内容はマジックワードで、学生にはそれを見抜かれてしまったと感じた。大きな気づきをたくさん与えてくれたにプログラムを考えてくれた学生には感謝したいと思う。

④帰りのヒースロー空港で

飛行機の搭乗時刻まで少し余裕があったため、ヒースロー空港では 40 分ほど各自お土産や軽食を買ったり、休憩したりできる自由時間があった。私は、ショップで多少お土産を買って、スターバックスで軽食を買うために並んでいた。前に並んでいたのは、ISA 添乗員の遠井さん。すると、私の後ろに並んでいた女性が順番を抜き、遠井さんの前にさりげなく入ってきたのだ。しかし、遠井さんは英語で厳しく対応した。自分の前だったらどうだっただろうか…。多分、気づいても上手く言い返すことができずそのままにしてしまったと思う。その遠井さんの後ろ姿を見ながら、自分のシャイな性格を直して、どんなことに対しても自分の意見をしっかり言いたいと思った。

● まとめ

UCL での講演で紅林さんは「自分を信じて進む」ということ、岡本さんは「社会的な失敗を恐れて挑戦しないことが、最終的に自分の人生での大きな失敗になる」とおっしゃっていた。この研修は、この 8 日間の滞在で終了ではなくて今後この経験を未来にどう繋げるかということが重要だと思う。今回の研修で、イギリスがどのような国なのか垣間見ることができたのはもちろん、海外に行くことで日本の良さや悪さ、また自分自身を知ることができた。現地でしか味わえない経験が溢れているので、ぜひこの Oxbridge 研修に参加してほしい。



最後に、この Oxbridge 研修は、前高の先生、ISA の担当の方、現地の方々、家族など多くの人の協力により大成功で終わることができた。この研修に関わってくれたすべての人に感謝したい。

小さな変化

店網 周平

中学三年生の時、前高の学校説明会で Oxbridge 研修の存在を知ってから、この研修に参加したいとずっと思っていた。この研修に参加することで自分が大きく変化し、成長することができると思ったためだ。実際、イギリスでは何から何まで日本とは違うことが多かった。また、自分の語学不足もこの上なく痛感した。

●研修で学んだこと

Oxbridge 研修には「生き様研修」というサブタイトルがつけられている。振り返ってみると、確かにその通りだったなと思う。

研修二日目、私たちはロンドン大学で紅林さんと岡本さんの話を聞いた。紅林さんからは UCL の准教授になった経緯や、自分が実際に研究していることについて、岡本さんからは自分のプロフィールや、現在の仕事の内容、世界の現状についての話を聞いた。お二方ともオックスフォード大学で研究をされていたということでも興味深い話だった。特に、紅林さんの「成功する前は成功のためのピースは分からないが、成功した後に振り返るとその成功のピースはわかるから、今は何かしらの成功につながると信じて自分が今直面していることに全力で取り組み」という言葉が印象に残った。また、岡本さんからの話の中で今の世界の現状としてどのようなものがあるかと質問されたときに私は「経済格差が広がっている」と答えた。その時に岡本さんはそのことについての話を広げてくれた。おかげでとても自分の考えが深まった。時間が足りなくなってしまったため、岡本さんの話が少ししか聞けなかったことが残念だった。今度機会があったら前高に来るとおっしゃっていた。その時には、持論を展開して色々質問したいと思った。お二方の生き様を聞いて、集団の中で自分がどのような立ち位置にいるかを考え、見極めることが重要であると感じた。

研修三日目、私たちは二人のオックスフォード生にオックスフォード大学内を案内していただき、大学の中の事を詳しく知った。特にハリー・ポッターの劇中の食事の撮影で使われた場所は映像で見たもののそのものだったので、とても迫力があり、自分がハリー・ポッターの世界に入り込んだかのような気持ちになった。



昼食の後、オックスフォード留学生との交流があった。留学生の中には日本人や、まさかの前高の卒業生がいた。日本人では東大を卒業してから留学するという人が多かった。話を聞いたり、質問したりした中で、私は、留学生は全員学習意欲がとても高く、色々な事に興味を持っていると思った。特にフランス人の留学生の方は母国語ではないに英語と日本語がとても流暢だったので驚いた。また、英語でコミュニケーションを上手にとるためには英語の映画を日本語吹き替え版で見た後、英語字幕で見るのが良いと教えてくれた。私は六人の留学生全員に将来どう生きていくのかという質問をしたが、各々具体的に答えてくださった。私は将来の夢が決まっていないので非常に参考になった。

研修四日目、私たちは Berkshire college (宿泊所) を離れ、Kaetsu centre に移動した。午前中はケンブリッジ生に大学内を案内していただいた。そのケンブリッジ生の方がイギリス出身だったのか、話す英語のスピードが速すぎて、あまり聞き取れなかった。(BBC ニュースのような感じ) 私はひるんでしまい、御礼の挨拶をする機会があったのにもかかわらず、ISA の遠井さんに背中を押されてもなお、一歩踏み出すことができなかった。これがこの研修中一番の後悔である。その時しかできない機会をみすみす逃してしまった。三日目の夜の反省会で「自分の可能性を信じて色々なことに挑戦したい」と言っておきながら。単に自分の英語力に自信がなかった。しかし、今はそれを考えても仕方がない。できる範囲で現地の方と接したいと思い、午後のサイエンスフェスティバルでは学生とコミュニケーションをとれるように積極的に話しかけた。その後集合時刻までの間、お土産を買っていた時に Ardmore の方とも会話ができたので少し成長できたと思った。

夕食後、次の日から二日間セッションをしてくださるケンブリッジ生からその二日間のカリキュラムを説明された。しかしここで一つ問題が生じた。それはそのカリキュラムにプレゼンが含まれていなかったことだ。私たちはプレゼンがあると聞いていたので、事前にパワーポイントなどで準備をしていた。その想定外の事態に私を含め全員がどよめいた。そして、プレゼンをどうするかという話し合いとなった。その時何故か私はプレゼンがなくなったことにとっても腹が立ち、帰った後でもいいからどうしてもプレゼンをしたいという発言を繰り返した。(おそらく自分たちの班が十分な準備をしていたからだと思う) プレゼンは帰ってから行うということになった。

研修五日目、六日目、ケンブリッジ生とのセッションで自分の将来の目標や理想のリーダー像などについて英語で各班の担当のケンブリッジ生に説明した。また、英語で上手にスピーチする方法を教えていただいたり、班内と生徒全体それぞれでディベートをしたりした。その後、一からスピーチの原稿を考え、ケンブリッジ生に添削してもらい、学んだことを生かして全体の前で発表した。個人的には原稿を見すぎたことが反省点だった。夕食後、私たちはケンブリッジ生相手にオックスフォードパーカーを着てディベートを申し込んだ。が、私たちが論されたような雰囲気となり惨敗した。男子校・・・

●感想

この研修中、自分の小さな変化に気付くことが多かった。この短い期間に大きく変わることはほぼ不可能だが、この研修で得た(日本ではすることができない)経験は脳に記憶されているため、自分が何か困難に直面した時に今までの自分とは少し違った対応ができるようになると期待している。



そして、その少しの変化が人生全体で見たときには大きな変化になるのだと思う。だからこの研修に参加できて非常に良かったと感じている。この研修で学んだことを日常生活のさまざまな所で生かしたい。

予想外の事が起こらないように支えてくださった中村先生、加藤先生、ISA の遠井さん、Ardmore の方々、両親、その他この研修に携わっていただいた全ての方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

HOW TO MAKE CONFIDENCE

田中 伊咲

●第6回 Oxbridge 研修への参加を考える人へ

まず、報告書を読み込んだほうが良い。有益な情報が多く載っている。以下は私の反省。①お金の使い方。私は、最終日に約 100 ポンド残っていた。計画的に使ったほうが良い。最終日は 50 ポンドもあれば十分。②折り紙。完成品も持って行ったほうが良い。私は、休憩時間に急いで折り鶴を作った。③けん玉、こま、かるた、扇子など。視覚的にわかりやすいものは伝えやすい。④ネタ。質問したいことや紹介したいことをなるべくたくさん手帳に書き留めておくことよ。もちろん英語で。⑤お土産。抹茶味のお菓子、煎餅など。⑥リスニング力の強化。

●研修まで

イギリスに行ってみたい。動機はそれだけ。1つ、「自分を見つける」という目標を立てた。

●1日目

温かい機内食に驚いたのは私だけだろう。現地時間の 17:00(日本時間 2:00)、空港から Ardmore(寮)への移動はとてつもなく眠かった。寮につくと、クリスさんが出迎えてくれた。そして、寮の使い方を説明してくれたのだが、全くもって聞き取れず、リスニング力のなさを実感した。夕食後、同じ寮にいたスペインの小中学生と簡単なゲームをしたのだが、またも説明が聞き取れず、友達に聞いて回った。結局、スペインの小中学生の活気に圧倒され、英語で話しかけに行く友人を横目に見ながら、何もできずに1日目が終わってしまった。

●2日目

ロンドン市内見学では、バッキンガム宮殿周辺を散策し、美しい街並みを目に焼き付けてきた。

大英博物館では、写真が自由に撮影でき、入館料が無料で驚いた。

寄付金を募る箱があり、私も1ペニーを入れてきた。

紅林さんの「俺のこれ、世界レベル」という言葉が印象的だった。

自分のできることをすればいい、と吹っ切れた私は、

夕食にけん玉を持っていき、スペインの小中学生と交流することができた。

クリスさんのセッションでは、1文の中で強弱をつけて話すことを学んだ。

紅林さんと岡本さんの講演が2日目で本当に良かった。



↑街並みとロンドンアイ

●3日目

Oxford 大学を現地の学生に案内してもらった。語彙力が乏しく、

わからない単語は多かったが、スピードには慣れてきたのか、

部分的に聞き取ることができた。嬉しかった。Oxford 生との

セッションでは、勉強法や Oxford に来た理由など、

将来を見据えた質問ができた。お礼の品を渡す係に立候補した

友人たちが、最後まで Oxford 生と談笑しているのを見て、

立候補しなかったことを後悔した。

チャンスを生かしきれていないと思った。



↑クライストチャーチ

●4日目

Cambridge 大学を現地の学生に案内してもらった。

3分の1くらいは正確に聞き取れたと思う。少しの進歩だが嬉しかった。前日にクリスさんが Cambridge のことを the other place と言っていたのを思い出し、Cambridge の学生に Oxford の呼び名を質問してみた。答えは the other place。初めて1対1で話し、少し自信になった。



↑キングスカレッジ

Cambridge science festival では、個人的に zoology のコーナーが1番興味深かった。

夜には、2名の Cambridge 生が来てくれ、勉強法などを聞いた。

●5日目 「empowerment program 1日目」

Cambridge での研修が本格的にスタートした。自分の将来について、2年後と30歳までの personal goal と professional goal について考えた。30歳までの目標は考えたことがなかったが、少し遠い未来の目標を持つことも必要だと思った。発表の時には、「大きな声で話して」と言われた。普段から声が小さく、英語に自信がなかった私は、ぼそぼそと話していた。さらに猫背だった私は、「肩を開いて堂々とする」という最も簡単なことを教わった。今まで姿勢のことを口出しされても、「このままの姿勢でいいじゃないか」と1ミリも直そうとしなかったのに、この時は素直に従っていた。Oxbridge 研修の魔法にかかったのだろう。結果的に、これが謎の無敵感を生み出し、とても話しやすくなった。スピーチの仕方で、最も苦戦したのが eye contact だった。原稿を暗記しやすくし、かつスピーチをよりよいものにすることができる gesture をなるべく多くした。頭と体を両方使うと、早く覚えられた。午前中は、発表したくないと思っていたが、午後の最後には発表したいと思えるようになった。夜のディベートでは、debater に立候補した。立論しただけで終わってしまったけれど、充実感が大きかった。

自信の重要性を思い知らされた日だった。

●6日目 「empowerment program 2日目」

朝食から Cambridge 生が来てくれ、仲良くなることができた。

「名探偵コナン」や「君の名は。」のファイルは役に立った。

leader に必要な能力について話し合い、自分の困難に立ち向かった経験をテーマに短いスピーチをした。正直、日本語での発表よりも



↑ケンブリッジ大学にて

堂々としていたと思う。また、持参した百人一首を紹介することができてよかった。

Cambridge 生 VS 前高生のディベートをした。自分の考えが浅いことを痛感した。

●まとめ

この8日間は特別な時間だった。話さなければ伝わらない。このことを再認識した。今までよりも広い世界を知り「自分を見つける」という目標は達成した。しかし、ここで研修を終わらせるわけにはいかない。出来ること、出来ないことを把握した自分をもっと発信しようと思った。「How to make confidence」 「俺のこれ、世界レベル」この2つの言葉を意識し、自分に自信と誇りを持って生活していきたい。

最後に、この研修に関わって頂いたすべての方への感謝で報告書を閉じたいと思います。本当にありがとうございました。

Oxbridge 研修を終えて

田中 優



●参加の動機

「自分のこれまでの生活では、将来の進路について考えてはいるものの、自分の中で納得できる答えを見出せていない。」私は、Oxbridge 研修の参加理由書にこのように綴った。

私の周りには、具体的な目標やビジョンを持っている前高生が多く、自分の未来像が見えない私は、常に焦燥感に駆られていた。そんな私は、この Oxbridge 研修に参加し、現地の学生と交流することで、自分の進路決定の根拠となるようなものが得られるのではないかと思い、参加することを決意した。

●研修の内容とそこから学び、考えたこと

・戸惑いからのスタート

Oxbridge 研修に参加するとは言え、私は、目立って英語が得意というわけではなかった。そのため、初端から意気阻喪するような経験をしてしまった。

まず、行きの飛行機内でのキャビンアテンダントさんとのやり取りの中での出来事だ。彼女は、私に機内食を渡すため「chicken or pasta?」と尋ねた。しかし、私には、「chicken on pasta?」と聞こえたため、「chicken on pasta please.」と答えた。そのため、彼女は、「No. No. chicken or pasta?」と尋ね直した。そのようなやり取りを二、三回繰り返した後、周囲に座っていた前高生の友達に助けられるという何とも恥ずかしく、また、情けない経験をした。

また、私たちが泊まった Berkshire College にスペインから来た子供たち(小学生から中学生)が宿泊していたので、急遽、初日に彼らと交流会を催したが、そこでも自信を失うような経験をしてしまう。彼らは幼いとはいえ、流暢な英語を用いて積極的に私たちに話しかけてくれた。そんな彼らの姿には、完全に圧倒された。同時に、私とコミュニケーションをとろうと積極的に話しかけてくれる彼らに対して、まともに受け答えができない私の英語力には心底がっかりした。

このように私の研修は負の感情で幕を開けた。

・異才な日本人との出会い

私たちは、2日目に紅林秀和さん、岡本尚也さんという方に講演をしていただいた。講演の内容が素晴らしかったということは言うまでもない。彼らがおっしゃっていたことが自分にとって不都合なことでも、とにかく理にかなっていたので苦笑するしかなかった。

紅林さんは、「高校時代に野球を頑張ったからこそ、今を生きる馬力がある。今やっていることが将来思わぬかたちで役に立つ可能性を信じろ。」とおっしゃっていた。後に、私の友人が Oxford の学生に「苦手な教科は将来役に立たないと考えているためモチベーションが上がらない。どうすべきか。」と質問した時も同じ内容の返答が返ってきた。紅林さんのみならず、成功者の実績は、その人が経験してきたすべての出来事によって構成されているのだなと感じた。

岡本さんは研究や実験について話してくれた。何が課題なのかかが問題である、現象のみならず原理を調べる、変わるものと変わらないものを調べる、という彼の意見は、決して目新しいものではなかったが、盲点を突かれた意見だったことには間違いない。この意見を踏まえて、総合の時間に行った私の研究

を見返すと、反省文が何枚も書けそうだ。

私は、講演が終わって、この人たちは真の天才だな、と感じた。特に、私たちの意見や質問をあらかじめ知っていたかのように行う返答の速さと的確さには、非常に驚いた。

この講演で私の様々なものに対する価値観が大きく変わったのは間違いない。

・オックスフォード、ケンブリッジの学生たちとの活動

彼らとの話の中で得られた情報は私の中の貴重な財産となった。冒頭で綴った将来の夢の定め方を始め、英語の勉強方法や暇な時間の使い方、睡眠時間、コミュニケーション能力向上方法、自信を持つためには・・・等々様々なことが聞けた(返答が理解できたとは言っていない)。特に印象に残った外国人とのやり取りを綴る。ある私の友人がケンブリッジの学生に対し、「あなたは幼いころから天才と呼ばれていましたか？」と尋ねたところ、ケンブリッジの学生は「呼ばれませんでした。私は努力をしたのです。」と返答した。私は、今回の研修で出会った多くの人に対し、この人たちには到底届かないだろうな、と感じていたが、この学生の返答を聞いて、結局これからの将来は自分次第だな、考えるようになった。

また、私たちは、色々あって最終日前夜にケンブリッジの学生とディベートすることになったが(色々な経験になった)、彼らの実力は私たちの予想を超越していたため、案の定、ボコボコにされた。

●最後に・・・

私は行きのバスの中で、消極的だった今までの自分と離別したい、と皆に宣言した。実際、研修中はそんなことを意識する暇もないくらいハードで、そのことを思い出した頃には帰国の途に就いてしまっていた。しかし、研修が終わった今振り返ってみると、今までの消極的な自分では考えられないようなたくさんの方の外国人と様々な意見を交わせたことに気づき、一週間で自分が気付かないうちにこんなにも成長をしていたのだなと感じられた。

今回の研修に参加したほとんどの前高生は、今回の Oxbridge 研修の全行程は終わったが、この研修で得たことを生かすためにはこれからの自分にかかっている、と考えていると思うし、私もそのうちの一人である。なりたいたい自分になるためにイギリスで得たことをこれからの日々に生かしたい。

●Oxbridge 研修第六期生へ

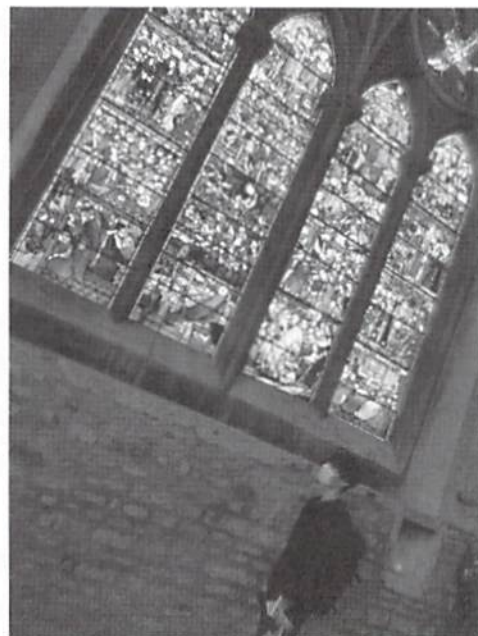
これから第6回 Oxbridge 研修を考えているその君！もし、君のご両親が許してくれるならば是非参加してほしい。研修で君の望んだ結果を得られる確信はないけれども、研修後、君には何が足りなくて、何をすべきかが明確になるのは違いない。君が君自身の成長を望むなら、参加して様々な刺激を受けることをお勧めする。挫折は若いうちに。



●LISTENING>SPEAKING!?

毎年毎年この研修が行われるうえで、生徒にとって最大の課題は“SPEAKING”・・・研修前でも一番懸念されてきたことで研修意気込む仲間たちも、もちろん私も研修前は SPEAKING 力→積極性を含むコミュ力を重要視していた、、、、、、でもどうやらそうでもないみたい、少なくとも私はそう感じた。

痛感したのは3日目の Oxford 生ガイドによる Chapel 見学と4日目の Cambridge 生によるキャンパスツアーのとき。お手上げだった、特に4日目の Cambridge のお姉さんは本当に速かった。SPEAKING 力の前に大きな壁があったことに初めて気づいた・・・LISTENING、学生さんたちは歴史的建造物に関する豊富なエピソードや知識を教えてくれた、私はいったい何割聞き取れたのか…。この研修に参加してみたいなと感じている人たちへ。ガイドの人でもネイティブスピードで話す人は本当に速いよ。だから LISTENING も大事にして、話しかけるよりもまず相手の言っている内容をある程度理解できるようにならなきゃ、向こうは私たちの英語のレベルなんて基本知らないのだから。



☆リスニングトレーニングでおススメのサイトは CNN10 (ネイティブスピード)

●Oxford 大学の Postgraduates—院生—との交流

この研修において、Oxford 大学の院生の方々に出会えたことは非常に刺激的な経験となった。今回のこの交流会には7名の院生が来てくれた。意外にも、Oxford 大学の院生の出身の占める割合は海外が高い。彼らも大学を卒業してから、自分のやりたいことを成し遂げるために Oxford 大学を受けたという。各グループに分かれて彼らと順番に話をして英語で話し合いを進めていたが、彼らの中には日本人や日本語が上手な院生も多くいたので、日本語でも意見を交わすようになった。特に、日本人の院生たちが東京大学などを出てから Oxford 大学に入学する経緯や生い立ちなどを英語で交えた日本語で聞いたのが本当によかった。この研修は別称「生きざま研修」、こうして特別な歩みをする彼らの生き方を少しでも知ることができるのもこの研修の目的であり価値である。

院生の彼らは皆それぞれが夢ややりたいことを持っていてそのために Oxford を選んだという感じだった。私には彼らがまぶしくて正直なところうらやましかった。流されてばかりだった自分がもう一度将来を考えるいい機会になった。

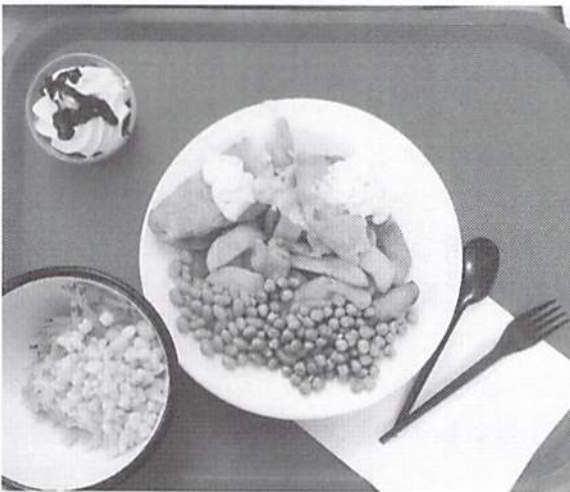
●UCL (ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン) でのレクチャー

2人の日本人を講師として招き、大学の一室を借りて講義をしてもらった。講義は日本語でもらえたので少しほっとした(笑) 現地で物理の教授として活躍している紅林さん、『課題研究メソッド』の著者の岡本さんが講義をしてくれた。二人とも Oxford の大学院を卒業していて現在の仕事で活躍しているという話を聞いていて研修前から楽しみにしていた。紅林さんは東大や慶応などの超一流大学に通っていたわけではないにもかかわらず、ひょんなことで Oxford 大学院に入り現在の仕事ができているという。彼はその経緯をもとに私たちに講義してくれた。

二人目の岡本さんは、この講義のためにわざわざ日本から来てくれた。日本ではいろいろな場所で講演を開いている。短い時間だったが彼のその深い思考に驚かされ、また自分もその講義中深く物事を考えさせられた……。どのような話だったかはぜひほかの研修生報告書を見て、ここでは割愛。

●イギリスの食文化、悪くないかも!?

研修前に散々イギリスの飯はまずいぞ!!とおどされてきた(笑)がそうでもなかった。



最初にとまったパークシャーカレッジ寮では、庶民的なイギリス料理を味わった。味付けの仕方はかなり雑だなと、もう少し詳しく言うと特にドレッシングやタルタルソースといった調味料やデザートは日本と比較すると非常に単純で大味だなと苦笑してしまった。それでもまずいとか苦手意識は持たなかった。研修中に胃が小さくなっていたことが悔しい、小食だった、フィッシュアンドチップスをもっと味わいたかった…

寮の次に泊まったホテルの朝食はすごかった、とても美味しい、語彙力消滅。脂っこいものも多く私はあっという間にノックダウンしてしまったが、スクランブルエッグ・ベーコン万歳。

ホテルの食事はなかなか豪華だったが、寮の食事もよかった
結論：イギリスの食文化結構いけるよ。

Oxbridge 研修に参加できたことに感謝。自分の世界の狭さを知れたし、Oxford 生や Cambridge 生と交流する機会なんてこの先やっとなないかもしれないと思うと本当に貴重な経験だったんだと思う。

おかげで海外留学を本格的に考えるようになった この研修に興味を持ってもらえたらうれしい、以上



●はじめに

僕がイギリス行きを決めたのは、焦燥感のためである。去年、第4回の研修に行くことも考えてはいて、同じ部活の仲間からの勧めもあったが、彼方にある未知の国で、仲間や向こうの学生たちに恥を晒しかねないことを恐れ、結局参加しなかった。しかし、前回の研修を終えて帰ってきた友人たちはすっかり豹変していた。生徒会長になった者、大企業に行って日常生活ではできない経験を得てくる者。彼らは本当に輝いて見えて、僕は参加しなかったことを後悔した。消極的で保守的な自分を殺し、リーダーシップを身につけ、彼らに負けじと成長したいと思い、今回の研修に参加した。

●外国の方とのコミュニケーション

今回の研修では、年代、国籍ともに多様な人たちと関わることができた。到着初日からスペインの小学生の団体とアクティビティをした。彼ら全員がいわゆるコミュカの塊で、僕が挨拶をした後、皆がガンガン会話を振ってくる。さらに、日本語も少し知っている。こちらからもそれをネタにして話しかけることができた。クリス教授や、初日から最終日まで僕たちのサポートをしてくれたオリは生まれがイギリスであったので、“Bohemian Rhapsody”やプレミアリーグの話題が通じるかどうか試してみようと思い、話しかけてみると、それに乗ってくれて、そこから色々な話をしていくことができた。イギリス関係の好きな物があって良かったと思った。オックスフォード生とは、個人的に話す時間はほとんど取れなかったが、質問の席では積極的に質問をしようと思い、6人いた学生全員に質問を投げかけることができた。逆に、ケンブリッジ生と関わる機会はとても豊富にあり、プログラム中に質問をぶつけるのは勿論のこと、食事中は皆と一緒に学生たちの近くの席に座り、彼らと話した。彼らは僕らの言っていることが分からなければちゃんと聞き返してくれるし、こちらも焦ることなく丁寧にもう一度話せば、彼らも納得し、会話を続けられる。聞き返されたとき、黙り込んでしまうと気まずくなってしまうと思ったので、僕はとりあえず何かしゃべることを意識した。また、日本を紹介する物として羽根つきを持って来て実演し、たまたま近くにいたドイツの学生を引っ張って一緒にやると、とても面白がっていたうえに、そこからテニスやサッカーの話題に繋げ、話に花を咲かせることができた。そこで英語を使うことに大分慣れたので、帰りの空港などで外国の方に話しかけてみることもできた。見知らぬ人に突然話しかけるのには勇気が要っ



たが、それをできたことで僕は自身の成長を実感した。今後日本でもそういった機会を作ってみたい。

● 紅林さんと岡本さん

彼らは、私たち全員にとって大変刺激的な話をしてくださった。僕にとって印象的だった話をまとめたいと思う。



① 意思決定を迫られたら、常に難しい方を選ぶこと。辛い環境に身を置くことで向上心を持ち、成長していける。リスクを恐れることは、逆に危険っ……！

② 過去の実績より、「今、自分が何を持っているのか」が大事なのだということ。どんな将来を描いているか、何に情熱を持っているのか、他人（社会、企業）に対して何ができるかを、私たちが目指すような大学や企業は意識している。現に、「あなたを雇うことで私たちは何を得られるか」と面接で尋ねる企業もある。

③ 我々は、普段使っている言葉の意味をおろそかにしているということ。我々はグローバル化と国際化の違いは何かということを知られ、少なくとも僕は全く答えが分からなかった。つまり、人がマジックワード（聞こえはいいが、抽象的で何を意味しているのか分からない言葉）を使ったとき、例えば政治家が演説でマジックワードを使いまくったとき、僕は批判的に見ることができず、字面だけでしか受け止められないということである。岡本さんにも言われたことだが、僕は社会問題に対する当事者意識がない。問題が、なぜ問題なのかが分からないのだ。これから新聞を読んで知らない言葉が出てきたら意味や実情を詳しく知るべきだと実感した。

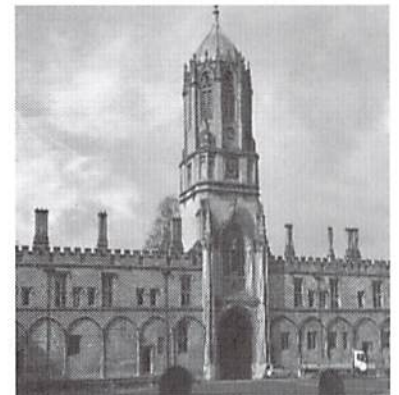
他にももっと色々話していただいたが、そのすべてが僕の胸に突き刺さってくるような感覚だった。講演が終わってから、自分や身の回りの物を見る目が変わり、なるべく多面的に捉えようとしているのを実感できた。この感覚を忘れず、これから生きていきたい。まずは学校の勉強から……！

● 研修での成功と失敗

僕はこの研修で数多くの成功をした。クリス教授から英語の発音やイントネーションについて学び、それを会話で意識できたこと、行き先で会った色々な人と会話できたこと、オックスフォード生（前高出身の人がいた）やケンブリッジ生から彼らの生き方について尋ね、自分の将来の夢への道が見えたこと。他にもたくさんある。本当に成長できた。しかし、一つ心残りがある。僕は二年生、つまり年長者として参加したにもかかわらず、リーダーシップを発揮できなかった。全体をまとめるために、何をすればいいのか全く分からなかった。このことが本当に悔しかったので、これからの人生でリーダーシップを養う機会を探し、逃さぬようにしたい。また、リスニング能力以前に、人の話を聞く力がないと痛感した。これも欠かせぬ力なので、意識していきたいと思う。

● 研修、そして人生はまだまだ続く

前述の通り、僕はこの研修で成功をし、失敗もした。失敗をしたときは精神的にこたえたが、それをしなければ自分の欠点に気が付けなかった。僕はここが最も大きな収穫であったと感じている。そして、一年生はもちろん、去年行かなかった二年生も絶対に行くべきだと思う。僕は、この研修で自分の未来を変えられると思っている。皆にも、それをしてもらいたいと思う。この報告書がその一助となれば幸甚である。最後に、引率して下さった ISA の遠井さんや中村先生、加藤先生、家族や仲間たち、この研修に関わったすべての方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



応募しよう！

茂木 光

まず初めに題名の理由です。ふざけているように見えるかもしれませんが、決してふざけているわけではありません。私はこの研修を通して心を変えることができました。行動や結果は今なんとかしているところです。私の身に起こったその変化は私自分だけが感じることでできるもので、あなたが私と同じ状況でもそこから得るものは私とは少なからず違うはずです。ですから、私はそれを文字で書き記すことが自分にはできないと考えました。それに、私は英国の地で過ごした時間の全てがこの変化に深く関わっていると思うのです。だから私は長〜い報告書を読み疲れた新1年生達のためにも、自分が彼らに言いたいことをこれくらいにコンパクトにして題名にしました。要はみなさんにもこの体験を味わってほしいということです。前置きが長くなりました。

私はOxbridge研修で学べることは主に5つあると思います。

- 一 自分のこと
- 二 友達のこと
- 三 学習のこと
- 四 将来のこと
- 五 感謝

バッキンガム宮殿→



1 自分には何が向いていて、何が向いていないのか。自分は何が好きなのか。自分が誇れるものは何なのか。この研修には自分と向き合う機会がたくさん設けられています。生き様研修というサブタイトルの通りこうなるよう仕向けられているとは思いますが、英国という異郷の地で自分はどんな人なのかをさらに深く考えることができると思います。現地で沢山の人々に会い彼らの考え方を聞く中で、自分ならこう考えるだろうといった意見を持つことで、自分のことについて自分が知らなかったことに気づき始めるからかもしれません。ちなみに、私は自分が人を見ることが得意で、人を引っ張って行くことが苦手な臆病者だということを再認識しました。このことは生きていく中で(なんだか壮大な感じがしますが)とても大切だと思います。なぜなら、自分を変えることはとても難しいので(これもこの研修で知ったことの一つです)自分とうまく付き合っていくほかに選択肢がないからです。

2 自分が集団の中で最下位に位置していたからかもしれませんが、一緒に研修の日々を過ごした友達から受ける影響はとても大きなものでした。前高の同学年の天才たちが集まる研修に自分が混ざっていたことは今も最大の疑問ですが、そんな僕にもみんな優しく接してくれて涙が出そうになりました。あの過酷な環境下を共に過ごす、友達がいかに大切かというのがわかります。帰国後、私はみんなに遅れを取っている分頑張らなきゃいけないと決意しました。いや、あの中に混ぜられたら置いていかれるわけには…。研修を共に力を合わせて乗り越えた仲間は私の宝物です。

3 みなさんの永遠に解けないと思われていた疑問が解決するかもしれません。なぜ勉強するのか。みなさんは考えたことありませんか？ 自分がこの研修を通して見出したこの問いに対する答えは、「受験の先にある幸せを掴むため」です。多分これは人それぞれなので深く言及しませんが、要するに仕事を得るためです。私は嫌いな仕事はしたく無いですし、それに絶対できないと思っています。自分の好きな

ことを仕事にして生きて行くために受験を突破する。受験を突破するために勉強する。現地の学生の方々が入学試験と何回も言っていたのでこう考えたのですが…、あくまで個人の意見です。

4 私はこの研修で諦めようとしていた夢を叶えたいと強く思うようになりました。自分の将来を見ようとしたことなんてなかった私が、この研修で初めて自分は10年後20年後どうなっているのだろうか、どうなっていたいだろうと考えました。自分の人生を決定する(かもしれない)この時期に、このように深く考える貴重な機会を得ることができて良かったと思います。もちろん結論が出たわけではありませんが、それでも今後の自分が大きく成長できるようになるきっかけには必ずなると思うからです。

5 Oxbridge研修で私はたくさんの人に支えられているのだと気づかされました。前高生はこの類の話を先生から何回も聞かされていると思います。私もその一人で分かったつもりでいました。しかし、私が予想していた何倍もハードだったこの研修で、このことを文字通り身にしみて感じました。かなりサバイバル的な要素をこの研修は含んでいます。なによりも毎日私に美味しい料理や快適な住まいを提供してくれる両親には感謝の言葉を伝えてみようと思いました。他にも学校や塾の英語の先生、加藤先生に教えられていなかったらきっと僕は迷える子羊になって遠いどこかへ… となっていたでしょうし、友達にはわからない単語などをたくさん通訳してもらいました。この研修をスムーズに行えるようにしていただいたISAさん(旅行会社)や、添乗員の遠井さん、中村先生など私がわからないようなところでも、きっと本当にたくさんの方に支えられてこの研修が成り立っているのだと思いました。本当にありがとうございました。

●まとめ

密度が濃すぎて書ききれないし、言葉でうまく表現できないし、と苦労しながら書いたこの報告書。ところどころよくわかんない日本語になっているのはそのためです。でも確実になにか自分にプラスになるものを必ず手に入れることができる。このことだけ伝わればいいなと思います。行こうかどうか迷っている人はもちろん申し込むべきなのですが、私のように行こうと思っていない人でも申し込んでみるべきです。私からのアドバイスは、「時差ぼけに注意!」「体調に気をつけて」



↑最終日Cambridgeにて、大学生達と。みんなありがとう!